

研

究

紀

要

第

14

号

縄文時代における環状列石の石材運搬について

児玉大成(青森市教育委員会)

1~14

三戸町下玉ノ木地区採集の弓矢文土器

野田尚志(三戸町教育委員会)

山口航生(三戸町総務課)

15~18

明戸遺跡における昭和41年の試掘調査報告

大久保学(十和田市教育委員会)

澤田恭平(青森県埋蔵文化財調査センター) 19~26

周辺を打ち欠いた土偶

成田滋彦(青森県埋蔵文化財調査センター) 27~30

原遺跡の概観－津軽南部の終末期古墳群－

滝本学(平川市教育委員会)

31~36

掘立柱建物跡からみた十三湊の社会構造と安藤氏像

中村隼人(青森県埋蔵文化財調査センター) 37~48

青森市近野遺跡・野辺地町楓ノ木(1)遺跡の未報告土偶・土製品－副題 土偶は分配されたのか－

成田滋彦(青森県埋蔵文化財調査センター) 49~58

2009. 3

青森県埋蔵文化財調査センター

縄文時代における環状列石の石材運搬について

児玉 大成（青森市教育委員会）

はじめに

縄文時代の後半期には、径10mを超える大型の環状列石が東日本を中心に構築されるようになる。これらは、日常的な生活の衣食住に関わる遺構とは別に、観念上の次元に位置付けて「記念物」あるいは「モニュメント」と呼ばれて⁽¹⁾、縄文社会の組織力を見せつけるとともに、当時の社会の仕組みや世界観を考える上で極めて重要な遺構となっている。このような環状列石が縄文時代の人々の間で、どのような意味をもっていたのかは、従来からの墓地説や祭祀場説に代表されるような用途・性格に関する研究⁽²⁾はもとより、太陽の運行や周辺の山々等の景観を考慮に入れた遺跡立地に関する研究⁽³⁾などにより、解明しようとする努力がなされている。

しかしながら、環状列石の構築・運搬に関する作業量や土木技術に焦点をあてた研究⁽⁴⁾はそれほど活発的ではなく、当時の社会的規模を考える上で、構築方法や土量・石材重量の把握など取り組むべき課題が多い分野ともいえる。

本稿では、以上のような現状を踏まえつつ、環状列石の構築に膨大な作業量が費やされていたという事実から、当時の社会組織や祭祀観の復元の一助として、石材の運搬に関する考察を試みるものである。

1. 運搬具について

我が国の運搬が機械動力によるものを使用するようになるのは、第二次世界大戦後のことであるが、それまでは人力運搬や家畜運搬が主体的であった。民俗学の分類（磯貝1958a）に従えば人力運搬には、手持ち運搬、頭上運搬、背負い運搬（肩担い運搬）、担ぎ運搬、腰下げ運搬があり、ほかに轡などを用いた運搬がある。

平安末期から江戸時代の文献や絵巻物などには、各種運搬の様子が描かれているものがあり、『日本常民生活絵引』や『洛中洛外図』所収の絵図から、萬納寺徳子(1972)が運搬方法の移り変わりの傾向を捉えようと試みている（図1）。江戸時代の土木工事（播磨沼開拓工事）の様子が記された『続保定記』には、担い棒の中央にモッコを取り付けて2人一組で土砂を運ぶ様子や天秤棒を用いて一人で運ぶ様子が描かれている（森1990）。石材の運搬については、近世の城郭普請を描写した『築城図屏風』が有名で、石材を縛り数人で直接牽引する「直引き」や、山車の一種である「地車」が使用され、巨石には「修羅」を用い、または「石吊り」によって行われている（北垣1981）。轡については、関秀志（1985a・b）が鈴木牧之の『北越

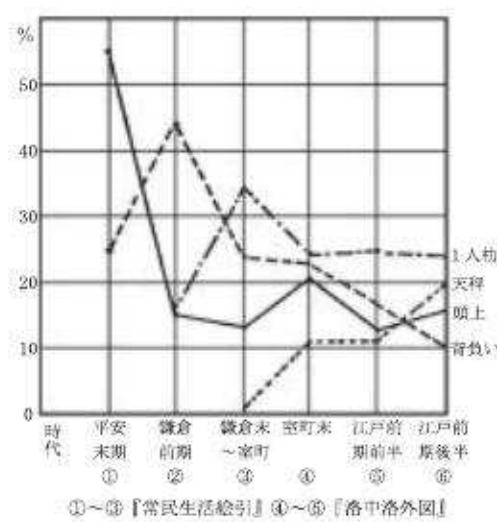


図1 運搬方法の変遷

萬納寺1972より転載

雪譜』をはじめとする江戸時代後期に描かれた絵画を紹介しているし、青森県下の雪橇に関する資料については拙稿(2007b)でも取り上げている。

また、考古資料としては、弥生時代から古墳時代の低湿地の遺跡から、背負梯子と天秤棒が出土しており、背負梯子はいずれも有爪型(図2)で枝分かれした木材が用いられている(山本1999)。櫓に関する資料では、鬼虎川遺跡(東大阪市)から弥生時代後期の「櫓形木製品」が出土しており、水田耕土の運搬などに用いられた湿地用櫓と考えられている(三宅1999)。大型の櫓としては、三ツ塚古墳(大阪府藤井寺市)の周濠から発見された二つの修羅が有名で、5世紀のものと考えられている。いずれもY字形を呈しており、赤檼製の大修羅は、長さ8.8m、幅1.8mを測り、先端部と二股に分かれた脚部に綱を掛けるために穿った穴がある。長さ2.9m、末端幅0.75mの小修羅はクヌギ製であった(朝日新聞大阪本社社会部1979)。また、氷雪上で用いられる櫓が、朝日山(2)遺跡(青森市)の井戸跡から出土しており(青森県教育委員会2002)、大きさが長さ37cm、幅20cm内外の小型で構造的には四ツ山櫓(勝谷1955)に酷似する。

2. 石材の運搬事例

最も基本的な方法で現在も日常的に行われているのが手持ち運搬で、環状列石の配石作業の際に石置き場から構築場所までの運搬に用いられていることが容易に想像できる。『日本書紀』(崇神紀)には古墳の葺石運搬に関する記述があり、石材の採取地から人列を作つて手から手へリレー方式で石を運んだものと考えられている(山本1999)。石材の運搬方法が、具体的にしかも詳細に明らかになるのは、近世城郭の石垣構築のための運搬で、石の大きさや形、運搬経路または地域などによって運搬方法が使い分けされている。すなわち大きい石については綱で曳く、荷車に載せて運ぶ、修羅を用いる、棒で挟んだ石または吊った石を担ぐ方法がある。また、一抱えほどの石は2人一組でモッコを使用し、また1人で天秤棒や背負梯子を用いる場合もある(北垣1981・1983、一瀬1999b)。

それでは、実際にどのようにして石材運搬が行われたのか、比較的近年あるいは現在もなお残る民俗事例を中心にみてみたい。

(1) 背負運搬

この運搬に用いられる道具には、背負梯子(図2)、背負袋、背負籠、背負縄などの種類があるが、中でも背負縄は、背負い運搬具としては最も原初的なもので、縄文時代においても使用されていた可能性が考えられる。

岐阜県揖斐郡徳山村では、背中に石があたる位置を決め、背負縄(クビカケ)を結んでコブ状にし、他人の手を借りて石を背中へ載せてもらい、コブで石を受け止めている(図3)。背負縄は一本縄で中央部分をクビと呼んで太くし、両端へゆくにつれ細くなる。石を運ぶ場合には、必ず背中当てが必要になるという(脇田1992)。

東京都西多摩郡檜原村では、昭和初期から昭和20年代の道路工事の際に、背負梯子が使用されていた(佐藤1992)。石を載せる位置が背負梯子の上の方でないと、川から道路まで楽に登ることができず、なるべく肩に力がかかるように取り付けられている(図4)。



図2 肩負梯子
磯貝1958bより転載



図3 石材の運搬事例
(徳山村の背負縄)
脇田1992より転載

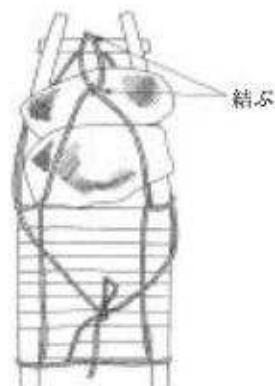


図4 石材の運搬事例
(檜原村の背負梯子)
佐藤1992より転載

(2) 担ぎ運搬

肩担い運搬とも呼ばれ、担い棒⁽⁵⁾を用いて間接的に担ぐ方法が多く用いられるが、肩に物を直接載せたり袋や籠などを利用したりする場合もある。機会動力が普及する以前の土木工事では、モッコを用いて前後2人が肩に差し担いにして石を運搬する例⁽⁶⁾が多く各地で行われていた。モッコは、繩網のみの担ぎ運搬具として呼ばれるものが多く、角形や円形を呈した網の四隅からのびる縄をU字形に引っ掛けるようにして担い棒に吊り下げる運搬具である(織野2000)。

(3) 橋曳き運搬

雪橇は、古くから雪国で用いられてきた運搬具であり、青森県の津軽地方では巨石を雪上で橋曳きする様子が、江戸後期から明治期の絵図や写真に残されている(児玉2007b)。幕末から明治の初めに描かれた『津軽風俗画巻』⁽⁷⁾では、引き手が二手に約30人ずつに分かれ、巨石に乗る人2人、後押しの人が7・8人ほどで、計約70人が運搬作業に参加している(図5)。また、明治22年(1889)頃に撮影された瑞楽園⁽⁸⁾の庭石運搬では、引き手や後援の人々を含め100人前後が作業に参加して巨石を運搬していることがわかる(写真1)。

氷雪上を滑走させるもの以外の橋⁽⁹⁾では、横に並べた丸太の上を滑らす木馬がある。宮城県本吉郡志津川町では明治後半から昭和初期にかけて「キンマ」が使用されていた(一瀬1999a)。入谷八幡神社に保管されていたキンマは、長さ3.3m、幅0.9mのY字形の二股橋である。明治43年(1910)に運ばれた石は、高さ2.5mほどもある花崗岩製の記念碑で、石の切り出し場から一尾根越えた八幡神社まで1.3kmの道程で運搬された。それには、村中の人が参加し、交代要員も含め、一度に50人ほどの人手を要したらしく、石の上で一人が音頭をとり、20人ほどが網を曳き、さらにバンギと呼ばれるコロを移動させる係やテコ棒をもった舵取り係などがいたという。



図5 『津軽風俗画卷』平尾魯仙原画・佐藤仙之模写（一部を掲載）
長谷川隆氏蔵、弘前市2000より転載



写真1 瑞楽園の庭石運搬（一部を掲載）
弘前市立博物館蔵、同写真提供

3. 石材運搬の実験例

運搬方法が具体的に明らかとなっていない場合や、運搬に関わる組織の規模がどの程度のものであったのかは、実験を通してある程度知ることができる。以下では、海外や国内で行われた石材の運搬実験をいくつか紹介する。

（1）海外の巨石運搬実験

海外には、ストーンヘンジをはじめ各地に巨石記念物が存在する。こうした遺跡は古くから知られ、長い間、巨石の運搬方法が謎に包まれていた。1950年代になると運搬実験が活発的に行われ、『実験考古学』（ジョン・コールズ1977）にそれらの事例がまとめられている。例えば、メキシコのオルメカ遺跡での実験では、2 t の石を吊った棒を担いだ場合、35人が限度であったという。ストーンヘンジの石材運搬に関する実験では、12人が櫓に載せた2 t の石を曳き、さらにほかの12人が進んで行く櫓の前にコロをはめていく作業を分担して行われた。また、コロのない実験では、櫓と石材との合計が2 t 弱で、32人が勾配4度の硬い地面の上を移動させている。イースター島の石像については、180人が2本のロープを二股になった櫓にかけて、10 t 近くもの石像を運んだという。また、『巨石文化の謎』（ジャン・ピエール・モエン2000）でも紹介され、木の幹を利用したレールの上にコロを置き、コロの

上に32tの石を載せて運搬するというもので、1979年の最初の実験では200人で牽引し、1995年の2回目の実験で120人で牽引した。このほか、「考古学－理論・方法・実践－」(コリン・レンフルーほか2007)の中でも、石材運搬の実験例が掲載されている。

(2) 修羅の牽引実験

日本国内では、昭和53年4月（1978）に三ツ塚古墳の発掘調査により発見された大修羅の牽引実験が最も有名である（朝日新聞大阪本社社会部1979）。この大修羅は、赤檜製であったが本州で同規模の大木を入手できなかったため、徳之島のオキナワウラジロガシを伐採、搬出。さらに、斧まで復元製作し、宮大工に修羅の加工を依頼するなど、修羅の製作段階から本格的に行われた。また、実験前の事前試験も周到で30tものコンクリートブロックを載せた修羅を用い、牽引力などの測定が行われた。同じ年の9月に大修羅の牽引実験が藤井寺市で行われた。この実験では、復元した修羅が自重4tを量り、その上に14tの巨石を載せて牽引し、地面を直に曳いたり、木馬道を敷設したり、コロを用いたりと方法を替えて行われた。結果、地曳きでは300人をもってしてもわずかしか進まず、横木を80cm間隔で並べた木馬道では引き手400人で掛け声1つで約1.6mを動かし、さらに潤滑油を塗ると300人で一気に40m以上も滑らした。最も効果的であったのが、コロを利用したものでロープ2本、引き手36人で滑らすことができたという。

(3) 小牧野環状列石での運搬実験

環状列石の石材運搬は、平成16年10月（2004）に青森市小牧野遺跡において実施された（青森市教育委員会2006）。実験では、背負い運搬、担ぎ運搬に加え、櫂曳きによる3通りの運搬が行われ、それぞれ背負梯子、モッコ、櫂が運搬具として用いられた（写真2）。運搬経路については、石材の採取地である荒川付近から遺跡までの丘陵地に、あらかじめ2つの経路を設定し区間距離と傾斜角を計測した。比較的勾配が緩い経路（995.0m）では櫂とモッコ、急勾配ではあるが遺跡までの最短距離の経路（387.6m）では背負梯子が用いられた。

この実験では、筆者もスタッフの一員として実験に携わることができた。実験の1日目は、重さ約90kgもの石を載せた櫂を4人で地曳きし、「イチ・二一、イチ・二一」の掛け声で渾身の力で引っ張った。途中、勾配がきつく、ぬかるみに足を取られて作業員が息を荒くしながら座り込む場面もあったが、1時間程かけて目的地の環状列石まで到達した。櫂を曳き終えた参加者の一人は「こんな重労働をした縄文人はすごい」と汗をぬぐった。

中型の石を運ぶのに最も威力を發揮したのが2日目に行ったモッコによる担ぎ運搬であった。藤ヅルで繩ナイした網を、担い棒に通したモッコに約30kgの石を載せ、2人で快調に運ぶことができた。小牧野環状列石の石は、推定30kg以下の石が9割近くを占めていることから、モッコを利用するこ

表1 小牧野遺跡における石材運搬実験の結果

運搬方法	参加人数 (人)	運搬距離 (m)	平均傾斜角 (度)	重量 (kg)			実験による運搬時間 (分)		環状列石の推定運搬時間 (分) ^{※1}	
				石材	運搬具	計	休憩除く	休憩含む	休憩除く	休憩含む
木櫂	4	995.0	6	92.9	32.2	125.1	23.0	70.0	7,688	23,399
モッコ	2	995.0	6	31.6	4.7	36.3	16.0	27.0	15,723	26,533
背負梯子	1	387.6	15	15.0	2.5	17.5	8.0	15.0	16,562	31,054

※1 環状列石の推定運搬時間=環状列石推定重量31,054kg/運搬石材の重量×実験による運搬時間

でほとんどの石を比較的容易に運ぶことができる。ある。

10kgほどの石を載せた背負梯子では、勾配約15度の山道を登ることができた。小牧野環状列石では、推定10kg以下の石が6割以上を占めており、この程度の重さの石を運ぶには原初的な背負繩を含め背負い運搬で十分と思われるが、距離が短いとはいえ急勾配のため息切れが激しい。

また、記録をとったわけではないが、10kg以下の石であれば手持ち運搬で何とか運べることも確認した。したがって、特に運搬具がなくても約6割もの石を素手で運搬することが可能なのである。



橇曳き運搬



同左



担ぎ運搬



背負運搬

写真2 小牧野遺跡での運搬実験

青森市教育委員会蔵、同写真提供

4. 環状列石の重量測定

大型の環状列石の構築や運搬には、膨大な作業量が集中的に投下されているため、その作業量を把握することで、当時の社会的組織の規模を推測することも可能と思われる。古墳においては、主に墳丘の土量を推測し、そこから必要とする作業人数や作業期間が推測されている¹⁰⁾ように、環状列石についても重量を把握することで、作業に費やされた延べ人数や時間を求めることができる。

(1) 小牧野環状列石の重量

環状列石に用いられた石材の重量を把握するには、実際に計量するのが一番確かな方法であるが、現物の石を動かすことができないような遺跡の場合には、石材の体積を求めて重量を推測することが可能となる。

石材を移動せずに体積を求めるためには、精度の高い3次元レーザーによる計測が理想的であるが、

石の数の多さや密度が高い環状列石などでは、現地での照合にかける手間や、点群データを囲む作業（範囲指定）に時間要するという難点がある。

そこで、小牧野遺跡では、あらかじめ採取地と考えられる荒川において、200個ほどの石の幅・高さ・厚さ・重量をはかり、回転楕円体としての体積と重量との関係を求めた。次に、環状列石を構成する石材の幅・高さ・厚さを計測して回転楕円体としての体積を求め、そのデータに係数を当てはめて以下のように重量を求めた（青森市教育委員会2006）。

《体積》石の体積 $V = 4/3 \times \pi \times L \times H \times W$ (L: 縦 H: 横 W: 厚さ)

《係数》河床において計測したサンプルのL・H・Wから求まる回転楕円体としての体積と重量をグラフにプロットし、近似直線を求めた。結果、

安山岩（サンプル数105）では、 $100 = 30000 k$ より $k = 0.0033$

石英安山岩（サンプル数54）では、 $10 = 2900 k$ より $k = 0.0034$

であったため、環状列石の9割を占める安山岩の係数 $k = 0.0033$ を用いた。

《石の重量》石の重量 $M = k V$

《計算例》縦27.0cm、横15.0cm、厚さ17.0cmの石の場合、

係数 $k = 0.0033$

石の体積 $V = 4/3 \times 3.14 \times (27.0\text{cm}/2) \times (15.0\text{cm}/2) \times (17.0\text{cm}/2) = 3,603.1 \text{ cm}^3$

石の重量 $M = 0.0033 \times 3,603.1 \text{ cm}^3 = 11.9\text{kg}$ となる。

《総重量》以上によって、求められた小牧野遺跡の総重量は31,054kgである。なお、環状列石の規模や構成石材の個数などは表2に記載した。

(2) 平面図から重量を推定する方法

しかし、これまでに報告された環状列石の計測データは、平面図から計測したものが多いために厚さを記載した例が少なく、また、より精度を高めるためには遺跡に関係する河床などに赴き重量計測可能な石材のサンプルデータを探る必要があるため、小牧野遺跡の計算方法や係数を単純に当てはめることはできない。こうした場合には、高沢周示（1998・1999）が提案した平面図から重量を求める方法もある。これは群馬県安中市の野村遺跡で行った環状列石の計測データ（縦・横・厚さ・重量）を用い、対象とする環状列石の平面図上の縦・横を計測し、そこから厚さと重量を求めるものである。この方法で求められた各遺跡の環状列石等の重量は表2のとおりである。

《計算式》体積 (cm^3) = 重量 (kg) $\times 823.74$

高さ (cm) = { (縦 (cm) + 横 (cm)) / 2 } $\times 0.52$

《計算例》縦27.0cm、横15.0cmの石の場合、

$$\{ (27.0\text{cm} + 15.0\text{cm}) / 2 \} \times 0.52 = 10.9\text{cm}$$

$$27.0\text{cm} \times 15.0\text{cm} \times 10.9\text{cm} = 4,414.5\text{cm}^3$$

$$4,414.5 \text{ cm}^3 / 823.74 = 5.4\text{kg}$$

表2 環状列石および類似遺構の重量計測表

遺跡名	所在地	遺構名 (構築時期)	規模 (石の個数)	重量				文献
				A. 実重量	B. 推定【回転 格円体】	C. 推定【平面 図計測】	D. における実重量と の差【C/A×100】	
小牧野遺跡	青森県青森市	環状列石 (後期前半)	最大径55m (2,899個)	—	31,054.3kg (10.9kg)	36,891.7kg (12.7kg)	—	青森市教育委員会2006
木上遺跡	青森県三戸郡南津軽町	大型配石遺構 (後期前半)	最大径17m (605個)	—	—	3,604.9kg (5.9kg)	—	名川町教育委員会2004
鷲ノ木遺跡	北海道茅部郡森町	環状列石 (後期前半)	最大径37m (698個)	—	—	18,810.0kg (31.4kg)	—	森町教育委員会2008
鷲ノ木4遺跡	北海道茅部郡森町	配石遺構 (後期前半)	全長約37m (289個)	4,054.3kg ^{※1} (14.0kg)	4,838.0kg ^{※2} (16.7kg)	4,911.5kg (16.9kg)	121.1%	森町教育委員会2006
衝の里5遺跡	北海道上磯郡知内町	Y-1 (後期前半)	最大径6.7m 168個	1,746.80 (10.4kg)	—	2,086.3kg (12.4kg)	119.0%	北海道埋蔵文化財センター1985
オクシバツ川遺跡	北海道斜里郡斜里町	J-27遺構 (後期後半)	最大径約10m 241個	1,653.90 (6.9kg)	—	1,269.5kg (5.3kg)	76.7% ^{※3}	斜里町教育委員会1980

*1 100kg以上の石が2個あり、いずれも100kgとして扱われている。

*2 回転格円体による計算方法は、本来、各遺跡(河床)ごとに、重量計測可能な複数の石材サンプルから係数を求めるものである。参考までに、縦・横・厚さを計測している鷲ノ木4遺跡に、小牧野遺跡の係数を用いると、4,838.0kg(平均16.7kg)、実重量との差は119.1%となる。

*3 平面図計測では扁平な石を想定しているため、丸い石が多い環状列石では実重量よりも軽くなる。

5. 環状列石の石材運搬に係る作業量

作業量を示す方法には、人工あるいは作業時間で示す場合と仕事量 (kgf・m)⁽¹⁾という単位で示す場合など様々ある。人工や作業時間を算出するためには、重量はもとより立地状況や距離などを詳細に分析・整理し、さらに過去の事例から工種ごとの計算方法を引用したり、実験結果に基づいて計算することが必要である。

例えば、小牧野遺跡のように総重量(推定31,054kg)と運搬実験の結果が数値化されている場合には単純計算で、推定重量/1個あたりの運搬石材の重量×運搬に費やした時間から、全体の作業時間を大まかに知ることができる(表1)。この計算に従ったときの運搬時間(休憩含む)は、櫛(4人)では23,399分、モッコ(2人)では26,533分、背負梯子(1人)では31,054分となる⁽²⁾。

仮に、現代の基本的な労働時間(8 h)で運搬日数をみた場合、櫛(4人)では約48日、モッコ(2人)では55日、背負梯子(1人)では64日分に相当する作業量となる。

さらに、石の採取地から環状列石までの水平距離、傾斜角、標高差を把握していれば、各遺跡の運搬時間を求める⁽³⁾とともに、各遺跡の構築規模を比較することも可能である(高沢1999)。

6. 祭祀としての石材運搬ーまとめにかえてー

縄文時代にどのような方法で石材を運搬したのかは、低湿地のような遺跡から運搬具が発見されない限り、具体的に明らかになることはないだろう。それでも、これまでみてきたような運搬事例や運搬実験などから、作業量を推測するための手掛かりを掴むことはできた。例えば運搬方法としては少なくとも、手持ち運搬、背負い運搬、担ぎ運搬、櫛曳き運搬が考えられ、これらの方法で小牧野環状列石の石材を運ぼうとすると、少なくとも1日8時間の作業で48~64日以上を要する計算となる⁽⁴⁾。

しかし、1日8時間というのは、あくまでも現代の標準的な労働時間であり、実際に運搬実験に従事した経験から言うと、一日に重い石を数往復も運ぶこと自体、体力的にも精神的にも考えにくい。また、当時の衣食住に係る生計労働の時間配分を考えても、これだけの作業量を短期間で行うことは非常に難しかったと思われる。環状列石の運搬を数日間、集中的に行つたとしても、せいぜい年に数

回あるいは年に1回、極端に言えば数年に1回でもいいくらいである。そうして考えたとき、環状列石の石材運搬というのは、単なる労働ではなく、すでに運搬自体も当時の祭祀形態の一つとして組込まれていたのではないだろうか。

現代においても、大きな石を多人数で運搬し、しかも労働ではなく祭祀として行われているのが愛知県犬山市の「石上祭」¹⁰⁾であり、環状列石の石材運搬の情景を想像させることから若干紹介してみたい。石上祭で使用する石は、担ぐ人数で大きさが決まるといい、2人では「サシ」、8人では「8テン」、16人では「16テン」、最大で「32テン」などと呼ばれ、「リンギ棒」(図6)の中心に縛りつけられる。石を運ぶ組織を「石連」と称し、かつては集落・町会単位を基本としていたが最近では、事業所や同好会単位へと変化しつつある。比較的組織が大きい石連では、32テンの石を担ぎ、これに長い引き綱が前あり数十人の引き手がつく。もちろん担ぎ手は屈強な若者が多い。ほかに冰や水、酒を担ぐ人、さらに全体の指揮者があつて石連が構成され、大きな石連になると200人もの大組織になるという(石上祭調査研究会2001)。例えば、数ある石連のうち32テン吊りの行列は、指揮者の合図と石上唄とによって整然と発進・停止・休息を繰り返す。指揮者の唄が途切れると、一斉に担ぎ手が掛け声とともに脚を揃えて動き出し、20度もある急勾配の斜面をグングンと登っていくのである。汗だくになった担ぎ手だけではなく、周囲の人たちも応援に力が入る姿は、小牧野環状列石での運搬実験と重なるものがあった。

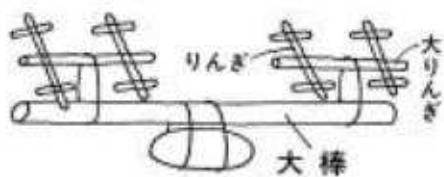


図6 石上祭で使用されるリンギ棒
犬山市1985より転載



リンギ棒に取付けられた献石（出発前）



リンギ棒を担ぐ石連



急勾配の斜面でテコ棒を使う石連



祭りの際に頂上まで上げられた献石

写真3 石上祭での石材運搬
筆者撮影

現代でも縄文時代においても、このような事業を行うためには、大勢の人間を的確に動かすことができるような指揮、あるいは長年に渡って培われた熟達した組織力が必要であるとともに、期間中の食糧および調理に伴う人員など後援の人々の協力も不可欠である。

大規模な環状列石については、土地の造成や配石作業、使用に至る期間が土器型式で数段階に及ぶ場合がある。小牧野環状列石にあっては、2段階ほどの時間幅⁽¹⁾が認められている。仮に、小牧野遺跡の石材運搬を「環状列石の構築を目的とした労働」として考えた場合には、前述した作業量を軸とすれば極めて短期間、逆に土器が存続する時間幅を基準とすれば非常に進捗が遅い、あるいは効率が悪いという解釈もなされよう。

しかし、「石材の運搬も祭祀の一つ」として考えれば、石を一度に多量に運び上げる必要もないし、急いで並べきる必要もなく、土器の時間幅から逆算した年間数百kg程度となる運搬量⁽²⁾も不自然ではない。また運搬技術に関して、多少の工夫はあったとしても、現代人のように効率的に運ぶ方法だとか、労力の節減は問題ではなかったと思われる。

おわりに

本稿を草するにあたり、資料提供や写真借用等で次の機関、諸氏にお世話になった。記して感謝申し上げる（敬称略）。

青森市教育委員会 弘前市立博物館 弘前市立弘前図書館 遠藤 正夫 葛西 勲
高橋 肇 成田 滋彦 長谷川 隆

註

- (1) 環状列石や盛土遺構などの大型構築物の総称として、小林達雄が「記念物」あるいは「モニュメント」と表現した概念である（小林編1995）。
- (2) 墓地説（駒井1959、斎藤1985）に対し、祭祀場説は墓地を否定して祭祀に関わる構築物として位置付けたもの（江坂1985）であるが、近年では二者択一的な議論ではなく、葬祭場や祖先崇拜の場として包括的に捉える傾向がある。
- (3) 川口重一（1956）による大湯環状列石での観測をはじめ、江坂輝彌（1971）の指摘、小林達雄らによる一連の研究（小林編2002・2005）、鳴崎弘之（2004）の論考などが挙げられる。
- (4) 諸戸靖史（1996）が土木工学の視点から石材運搬の「仕事量」の求め方を提案し、高沢周示（1998・1999）が野村環状列石（群馬県安中市）の重量データから、各地の環状列石の重量を求める作業量の比較検討を行った。高沢の研究に刺激を受けた筆者は、小牧野遺跡を中心に環状列石の作業量や土木技術を意識した調査・研究を行うようになり、本稿もそうした視点に立っている（児玉2004・2007b、青森市教育委員会2006）。
- (5) 担い棒には、基本的に天秤棒と杓の2種があり、前者は棒の両端に縄で吊るした籠に荷を入れ、後者は両端を尖らせて荷に刺し込んだり、両端に取り付けた箱や籠に荷を入れたりする一人杓と、荷を中ほどに結わえて前後2人で担ぐ二人杓がある。
- (6) こうしたモッコは、香川県綾歌郡綾南町で「石モッコ」（三上1988）、香川県高松市の離島で「石オーコ」（織野1992）と呼ばれている。

- (7) 幕末から明治初めにかけて平尾魯仙に描かれた風俗図で、原画は現在のところ不明である。図5は、弟子の一人である佐藤仙之（部）が模写したもので、複数ある図のうち雪橇に関するものを掲載した。
- (8) 大石武学流の枯山水式の庭園で、国指定の名勝。明治23年から38年（1890 - 1905）まで15年の歳月をかけて改庭され、昭和に入ってからも増庭されている（弘前市教育委員会1984）。
- (9) また、石材運搬ではないが、丸太（コロ）の代わりに、テコ棒を橇の底部に差し込んで、浮かしながら滑らす橇もある。山梨県北都留郡丹波山村の大正月行事「お松ひき」は、松や竹、しめ飾りを橇に載せ、集落ごとに道祖神前まで運搬するもので、キンマと同様にY字形の二股橇である（北垣2003）。約500mの距離を長さ4.2m、幅1.3mの橇で約3時間ほどを要したという。
- (10) 梅原未治（1955）により仁徳天皇陵古墳の墳丘の土量1,405,866m³が示され、そこから1人1日の労力を1m³、運搬距離250mと仮定して、述べ1,406,000人、即ち1日1,000人ずつ作業に従事して4年近くの年月を要すると試算した。また同様の観点で鈴木啓（1981）が、福島県龟ヶ森古墳の墳丘の土量25,308m³を算出し、床堀工、締固工、石積工など工種を細分し計算したところ述べ142,094人を要するものと試算した。
- (11) 諸戸靖史（1996）が土木工学の視点から小牧野環状列石の石材運搬に係る労力を推定する以下の計算式を提案。仕事量kgf·m=石の重量kgf×(標高差m+水平距離m)。仮に小牧野環状列石に用いると、31,054.3kgf×(80m+300m)=11,800,634 kgf·mとなる。
- (12) ただし、遺跡から河床までの下りの歩行時間は含まれていない。
- (13) 高沢周示（1998・1999）が提案した計算式。作業時間=遺跡と河床との往復時間×(環状列石の総重量/1回に運ぶ重量)
- (14) 当時の生活の時間配分を考慮すれば、さらに相当な補正係数が必要となる。
- (15) 毎年8月の第一日曜日に大宮浅間神社（標高約100m）から尾張富士の頂上（標高約275m）までの参道（約500m）を消めるために行われている。祭りは、一種の背くらべ伝説や近隣の村人が願いを託した石を奉納（献石）したことが由来とされ（伊奈1957、犬山市1985）、献石に刻まれた文面から天保7年（1836）には既に行われていたようである。石は当初は自然石が普通であったが、次第に「献石」の文字や石連（奉納者）の名称、年月日などを刻み込むようになった。大棒に結わえられた献石の上には、「家内安全」「病氣平癒」などと願い事を書いた赤・白・青と色とりどりの布を飾りつけている。
- (16) 小牧野遺跡の縄文後期前半の土器は4段階に区分されているが、これらを14C年代測定した結果、200~300年間程度の存続期間が確認された（國木田ほか2009）。このうち環状列石の構築・使用に関わっていたのが2段階分あり、その主体となる十腰内IA式に相当する段階（児玉1999）で120年前後の時間幅が認められた。
- (17) 例えば、小牧野環状列石の存続期間を120年間（十腰内IA式期を基準）と仮定したときの年間運搬量は258kg（=推定重量31,054kg/120年）となる。これを橇を用いて120年で運び上げる人数は最低でも年1回あたり11人（=4人/92.9kg×258kg）を要する。また年に1回のみ、実験と同じように4人で運ぼうとすると334年（=推定重量31,054kg/運搬石材の重量92.9kg）となり、1年に2日連続の事業だと167年を要することになる。

引用・参考文献

- 相原俊弘(1983)「構造工学からみた古墳の墳丘」『季刊 考古学』第3号 雄山閣 32-35頁
- 青森県教育委員会(2002)『朝日山(2)遺跡V』
- 青森市教育委員会(2006)『小牧野遺跡発掘調査報告書IX』
- 朝日新聞大阪本社社会部(1979)『修羅 発掘から復元まで』朝日新聞社
- 石上祭調査研究会(2001)『石上祭調査報告』
- 磯貝勇(1958a)「生産に関する道具・運搬具」『郷土研究講座』第4巻 生業 角川書店 225-258頁
- 磯貝勇(1958b)「背負い梯子-背負い運搬具とその用具-」『日本の民具』角川書店 139-163頁
- 伊奈森太郎(1957)『尾張の祭り』東海叢書第6巻 名古屋鉄道
- 犬山市(1985)『犬山市史』別巻 文化財・民俗
- 一瀬和夫(1999a)「キンマの残存とその石曳き伝承」『修羅!-その大いなる遺産 古墳・飛鳥を運ぶ-』大阪府立近づ飛鳥博物館 74頁
- 一瀬和夫(1999b)「巨石の運搬」『修羅!-その大いなる遺産 古墳・飛鳥を運ぶ-』大阪府立近づ飛鳥博物館 95-98頁
- 伊藤廣之(1986)「近畿の担い棒」『日本民俗文化体系』第14巻 技術と民俗(下) 小学館 308-309頁
- 梅原末治(1955)「応神・仁徳・履中三天皇陵の規模と造営」『書陵部紀要』第5号 宮内庁書陵部 1-5頁
- 江坂輝彌(1971)「縄文時代の配石遺構について」『北奥古代文化』第3号 北奥古代文化研究会 9-16頁
- 江坂輝彌(1985)「配石遺構とは」『考古学ジャーナル』No.254 ニュー・サイエンス社 7-10頁
- 大阪府立近づ飛鳥博物館(1999)『修羅!-その大いなる遺産 古墳・飛鳥を運ぶ-』
- 大塚初重(1983)「古墳の築造と技術」『季刊 考古学』第3号 雄山閣 14-17頁
- 大林組プロジェクトチーム(1998)『三内丸山遺跡の復元』学生社
- 織野英史(1992)「雌雄島の生活と運搬具」『運搬具-背負う・提げる・載せる・曳く-』神奈川大学
日本民俗文化研究所第16集 平凡社 127-168頁
- 織野英史(2000)「もっこ」『日本民俗大辞典』下 吉川弘文館 697頁
- 勝谷稔(1955)『雪のみち』積雪科学館
- 勝部正郊(1991)『雪の民具』慶友社
- 川口重一(1956)「大湯町環状列石の配置」『郷土文化』第11巻第1号 名古屋郷土文化会 1-4頁
- 北垣聰一郎(1981)「穴太の系譜と石材運搬」『日本城郭大系』別巻I 新人物往来社 209-319頁
- 北垣聰一郎(1983)「石材運搬の技術」『季刊 考古学』第3号 雄山閣 59-61頁
- 北垣聰一郎(2003)「丹波山村『お松ひき』にみるソリについて」『研究紀要』19 山梨県立考古博物館・
山梨県埋蔵文化財センター 183-193頁
- 木下忠(1989)「解説」『背負う・担ぐ・かべる』双書フォークロアの視点7 岩崎美術社 192-225頁
- 國木田大・吉田邦夫・児玉大成(2009)「小牧野遺跡における土器付着炭化物の14C年代測定」『青森県
考古学』第17号 青森県考古学会(印刷中)
- 黒田一充(1999)「修羅という名」『修羅!-その大いなる遺産 古墳・飛鳥を運ぶ-』大阪府立近づ
飛鳥博物館 87-90頁
- 児玉大成(1999)「小牧野遺跡における環状列石の構築時期」『青森県考古学』第11号 青森県考古学会

15 - 32頁

- 児玉大成(2004)「環状列石にみる縄文時代の土木技術」『月刊 文化財』485号 第一法規 31 - 35頁
- 児玉大成(2007a)「北日本のストーン・サークル－青森県の諸遺跡－」『季刊 考古学』第101号 雄山閣 27 - 32頁
- 児玉大成(2007b)「雪と環状列石－石材運搬に関する一考察－」『青森県考古学』第15号 青森県考古学会 41 - 50頁
- 小林達雄編(1995)『縄文時代における自然の社会化』季刊考古学・別冊6 雄山閣
- 小林達雄編(2002)『縄文ランドスケープ』ジョーモネスクジャパン
- 小林達雄編(2005)『縄文ランドスケープ』アム・プロモーション
- 駒井和愛(1952)「日本の古代ーストーン・サークルの発掘を通してー」『毎日新聞』11月18日付 (1973)『日本の巨石文化』学生社 所収)
- 駒井和愛(1959)『音江』慶友社
- 斎藤忠(1985)「配石遺構－特に環状列石についてー」『考古学ジャーナル』No. 254 ニュー・サイエンス社 2 - 6頁
- 佐藤広(1992)「背負梯子の歴史的位相－東京都西多摩郡檜原村の背負梯子を例としてー」『運搬具－背負う・提げる・載せる・曳く－』神奈川大学日本民俗文化研究所第16集 平凡社 43 - 88頁
- 鳴崎弘之(2004)「縄文人の方位観」『帝京大学山梨文化財研究所研究報告』第12集 帝京大学山梨文化財研究所 207 - 242頁
- 斜里町教育委員会(1980)『オクシベツ川遺跡発掘調査報告書』
- 鈴木啓(1981)「史跡 龜ヶ森古墳の土量と労働量」『福大史学』第5号 福島大学史学会 115 - 118頁
- 鈴木牧之(岡田武松校訂)1936『岩波文庫 北越雪譜』
- 須藤功(2001)『道具としてのからだ』草の根出版会
- 須藤功編(1988)『写真でみる日本生活図引』2 とる・はこぶ 弘文堂
- 関秀志(1985a)「江戸時代の文献に見える櫛について」『雪と生活』第4号 雪と生活研究会 2 - 19頁
- 関秀志(1985b)「東北地方の櫛(江戸時代の文献にみる)」『日本民俗文化体系』第13巻 技術と民俗(上巻) 小学館 299 - 301頁
- 関秀志(1987)『手櫛』資料解説シリーズNo. 9 北海道開拓記念館
- 高沢周示・児玉大成(1998)「小牧野遺跡における環状列石を構成する礫運搬の作業量について」『小牧野遺跡発掘調査報告書III』青森市教育委員会 58 - 94頁
- 高沢周示(1999)「環状列石構築に費やされた作業量－群馬県野村遺跡をモデルとする一試論－」『物質文化』67 物質文化研究会 27 - 40頁
- 高橋逸夫(1937)「石舞台古墳の巨石運搬並に其の構築法」『大和島庄石舞台の巨石古墳』京都帝国大学文学部考古学研究報告第14冊 京都帝国大学文学部 71 - 82頁
- 長岡昭雄編(2001)『尾張富士 石上祭ものがたり』(私家本)
- 名川町教育委員会(2004)『水上遺跡発掘調査報告書II』
- 弘前市(2000)『新編 弘前市史』資料編3(近世編2)
- 弘前市教育委員会(1984)『弘前の文化財(庭園)』文化財シリーズNo. 11

- 福田友之(2004)「雪国の考古学－忘れられた縄文の冬－」『研究紀要』第9号 青森県埋蔵文化財調査センター 29 - 34頁
- 北海道埋蔵文化財センター(1985)『湯の里遺跡群』
- 萬納寺徳子(1972)「絵巻物よりみた運搬法の変遷」『民具論集』4 慶友社 35 - 58頁
- 三浦貞栄治(1986)「青森県の雪の民俗」「雪の民俗ところどころ」明玄書房 41 - 67頁
- 三上妙子(1988)「もっこ（畚）」『民具実測図の方法Ⅰ－農具－』神奈川大学日本民俗文化研究所第13集 平凡社 202 - 203頁
- 三宅正浩(1999)「ソリと修羅」「修羅！－その大いなる遺産 古墳・飛鳥を運ぶ－」大阪府立近つ飛鳥博物館 83 - 86頁
- 森浩一(1990)『交錯の日本史』朝日新聞社
- 森町教育委員会(2006)『鷺ノ木4遺跡』
- 森町教育委員会(2008)『鷺ノ木遺跡』
- 森山泰太郎(1972)『日本の民俗 青森』第一法規
- 諸戸靖史(1996)「土木工学より見た環状列石工事に関する所見」『小牧野遺跡発掘調査報告書』青森市教育委員会 224 - 228頁
- 柳田国男(1945)「棒の歴史」『村と学童』朝日新聞社 135 - 182頁
- 山本 彰(1999)「手持ち運搬具」「修羅！－その大いなる遺産 古墳・飛鳥を運ぶ－」大阪府立近つ飛鳥博物館 75 - 78頁
- 脇田雅彦(1992)「美濃・徳山村塚の運搬具について」「運搬具－背負う・提げる・載せる・曳く－」神奈川大学日本民俗文化研究所第16集 平凡社 89 - 125頁
- 成田敏(2000)「247 津軽風俗画卷」『新編 弘前市史』資料編3（近世編2）弘前市 775 - 778頁
- コリン・レンフルーほか(2007)『考古学－理論・方法・実践－』東洋書林（訳：池田裕ほか）
- ジャン・ビエール・モエン(2000)『巨石文化の謎』創元社（監修：藏持不三也・訳：後藤淳一ほか）
- ジョン・コールズ(1977)『実験考古学』学生社（訳：鈴木公雄）
- マイラ・シャックリー(1982)『石の文化史』岩波書店（訳：鈴木公雄）

追記：本稿で使用している市町村名については、平成の合併以前の名称を使用したものもある。

三戸町下玉ノ木平地区採集の「弓矢文土器」(資料紹介)

山 口 航 生 (三戸町役場総務課)
野 田 尚 志 (三戸町教育委員会)

1 はじめに

本稿は、三戸町大字豊川字下玉ノ木平地区にて採集した、弓矢の意匠を持つ絵画土器について紹介し、その詳細を報告するものである。なお、タイトルを「狩獵文土器」ではなく「弓矢文土器」とした理由は次のとおりである。

本資料の文様は、客観的に見て間違いなく「弓矢」と認められる線画である。しかし、「弓矢」が描かれた破片を偶然拾っただけで、器面全体の様子は不明であるなど、断片的情報から狩獵的行為を表す絵画と特定することは困難と考えられた。このことから、本稿は本資料における事実記載に留め、破片から読み取れる情報以上の推考は行わないこととする。

2 発見の経緯

2007年3月下旬に当地区を車で走行中、畑地の中にひときわ大きく削平された跡が目についた。この付近は、以前から縄文時代前・中・後期の遺物が表採できるところであったことから、念のため踏査した結果、多数の土器片や石器の散乱を確認した。表採を数日間行い、段ボール1箱半ほど持ち帰り洗浄したところ、中から見慣れない文様のある土器片に気づき、本資料の発見となった。

3 地理的環境

当地は三戸町の中心部から西南へ約4.5kmに位置する。北側に300mほど離れたところに流れる熊原川により形成された段丘で、台地は北側に向かって傾斜している。本資料発見地の東側と西側には3~7m以上を測る深い沢があり、東側の沢には現在も水の流れが確認される。標高は約100mで、周辺一帯は果樹園・畑地・水田などが広がる純農村地帯として営まれている。当地は地元の人々にも遺跡としての認識があったようで、耕作等で採集された縄文時代前期・中期を中心とした遺物が、民家や閉校した旧校舎に保管されていた。

4 発見時の状況

表採した地区は、傾斜地の高低を削平と盛土により平地造成されたところで、本資料は、当地の稜部中心から北東方向に傾斜する部分に盛土された表土より採取したものである。

付近に露頭する地層から、現地の基本層序は次のように大きく分層された。〔第Ⅰ層：表土〕、〔第Ⅱ層：数mm~1cm大の白色・黄色浮石を含む黒色土層〕、〔第Ⅲ層：中揮浮石層〕、〔第Ⅳ層：数mm~1cm大の黄色浮石を含む黒色土層〕、〔第Ⅴ層：南部浮石層〕。表採資料は本来第Ⅱ層に包含していたと考えられる。

本資料の他に表採された遺物の内訳は、円筒下層d 2式、円筒上層e式、大木8a~10式の土器片が中心であるが、後期前葉の土器片も数点みられる。この他に時期不明の土製品が数点、石器については、石鏃、石匙、剥片、礫石器など十数点が表採された。



青森県三戸郡三戸町大字豊川字下玉ノ木平地内
東経：141度14分15.2秒、北緯：40度21分41.1秒

5 文様

本資料は深鉢形土器の口縁部破片である。推定される直径は約30cm、厚さは1cmほどで、山形状突起をもつものと考えられる。口唇部から頸部はナデとミガキ調整による無文帶で、一条の横位沈線文によって区画されている。頸部～胴部にかけての文様は明確ではないが、沈線文と縦位回転のR L 縄文が施されている。そして弓矢文は磨消された部分に沈線で描かれている。

弓は土器の体位と平行し、弓部は弧状、弦部は直線状に描かれている。両端部は、欠損のため全体画は不明である。弓部の両肩部には突起状の線が描かれており、競技用弓に付属する照準器に似た様相であるが、これは装飾の類として考えられている。

矢は弓の中心に描かれ、引き絞る前か発射直後の様相である。矢の先端には沈線で正三角形が描かれているが、これは矢尻を表現したものと捉えられる。

弓矢文の右側にも沈線文が見られるが、途中が欠損しているため連続性があるものは分からぬ。本資料はその特徴から大木10式土器に分類されると考えられ、この弓矢文は、土器の主体的文様に連なるように描かれたのかもしれない。

この他に、同一固体と思われる土器片も数点見つかっているが、当文様に接合するものとしては確認されなかった。

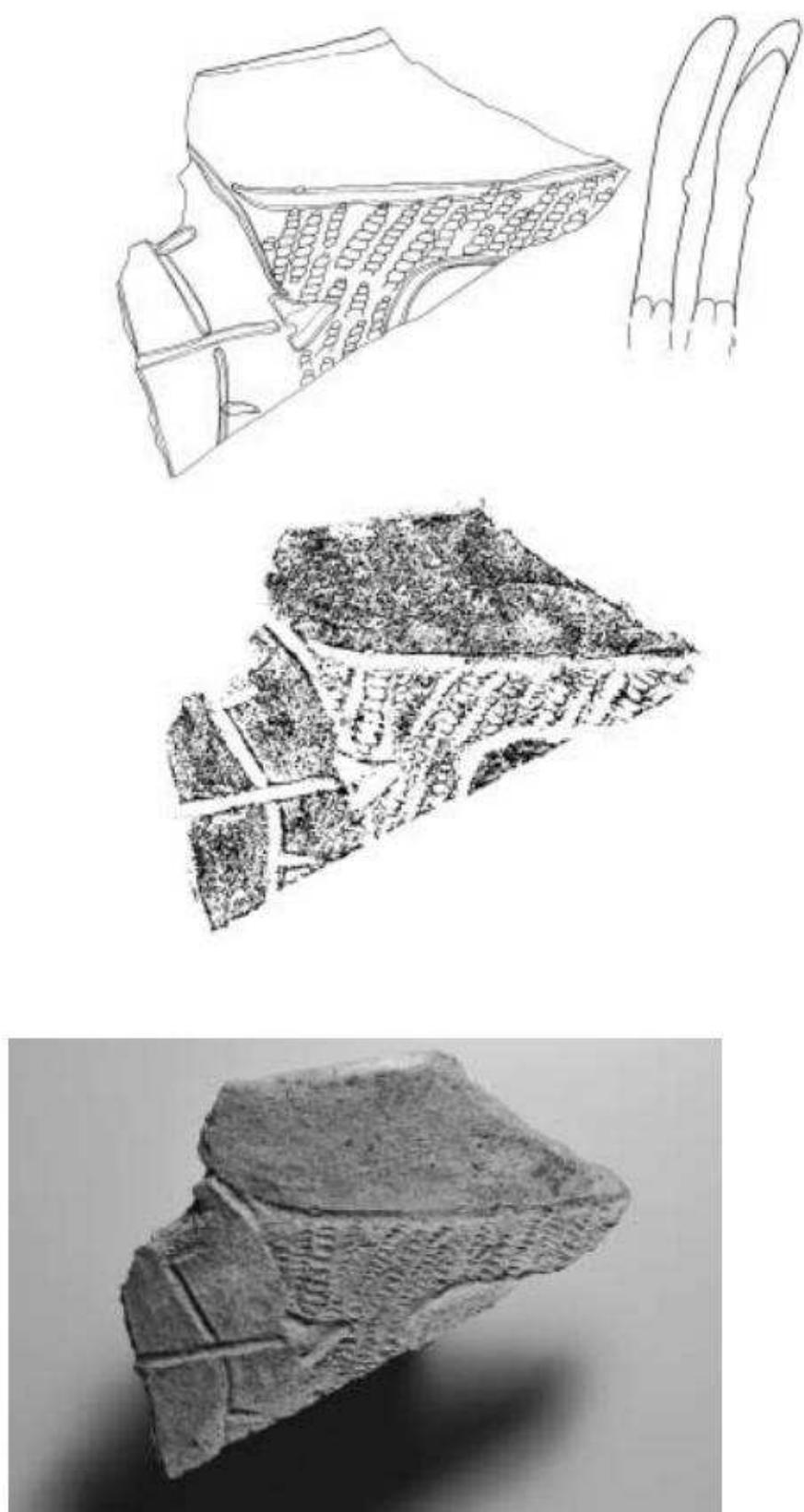
6 おわりに

縄文時代における絵画的意匠の見られる土器の中で、弓矢や樹木等の描写として認められる文様をもつものは「狩獵文土器」という分類で扱われる傾向にある。しかし、前述したとおり、本資料においては表現された文様が狩獵として捉えることができないため、視覚的に得られる確実な情報にもとづき、暫定的に「弓矢文土器」と名付けた。

縄文時代の各時期・地域毎に様々な文様が施される遺物中で、視覚的に理解可能な絵画資料は縄文文化を知る上で大変貴重な存在であることは言うまでもない。特に、当該資料に分類される「狩獵文土器」は明瞭な描写が見られ、意匠についても類似している個体があることから、文様意図の解明についての研究が深まってきている。しかし、弓矢は歴史上において敏捷な動物を狩る獵具や戦闘における兵器の他、祭礼や儀式の用具としても使われてきた。これらのことから、本資料については「弓矢」＝「狩獵」とは特定せず、再考の余地を持たせることとし、今後は、類する他の絵画や器種と比較を重ね、「用途」についても迫れるよう調査追究していきたいと考える。

今も、この弓矢文土器に接合する破片を探すため、足繁く現地へ通い続け表採を試みているが、残念ながら未だに他の部片は見つかっていない。しかしながら、造成作業の合い間に本資料を採集できることは極めて幸運であったことと考えたい。

最後になりましたが、本資料に関してご教示くださいました葛西勲先生に深くお礼申し上げます。



弓矢文土器観察

器種－深鉢形土器

文様－口縁：無文、胴部：沈線文、R L 縄文(縦位回転)、無文(磨消)、弓矢が沈線で描かれている

備考－外面に微量の炭化物が付着、胎土に1 mm以下の雲母を多量に含む。

明戸遺跡における昭和41年の試掘調査報告

大久保 学（十和田市教育委員会）

澤田 恭平（青森県埋蔵文化財調査センター）

はじめに

明戸遺跡は、十和田市の中心市街地から約10km南に位置し、奥入瀬川支流の後藤川と大沢と呼ばれている小河川に挟まれた舌状台地の緩斜面に位置する。本遺跡は、縄文時代前期から晩期の遺跡として知られており、これまで4度に渡り発掘調査が実施され、来年度も発掘調査が予定されており、今後の調査成果が期待される遺跡である。

また、大沢の対岸には、高屋遺跡が存在し、縄文時代前期・晩期の散布地として周知されている。平成20年度に実施された青森県埋蔵文化調査センターの発掘調査によって、縄文時代の竪穴住居跡が確認されている。

十和田市教育委員会では、平成19年度に県道戸来十和田線凍雪害防止工事に伴い発掘調査を実施し、平成20年度に整理・報告書作成事業を実施している（大久保2009）。その際、十和田市郷土館収蔵庫において、昭和41（1966）年に実施された試掘調査報告書が発見された。その試掘調査報告書を見ると、出土遺物の実測や写真が数点掲載されているが、未報告であったため、出土遺物の一部を再整理し報告することとした。また、残りの遺物については、今後別な機会に報告を行う予定である。

1. 発掘調査略歴

明戸遺跡はこれまで本発掘調査を4回、その他、試掘・確認調査を5回実施しており、概要是下記一覧のとおりである。

本遺跡は、これまでの発掘調査から縄文時代前期～後期の竪穴住居跡や晩期の墓坑等の遺構が検出されている。出土遺物をみると、縄文時代前期・晩期の遺物が非常に多く出土し、縄文時代前期に集落として使用され、断続的に渡って生活が営まれていたと思われる。

表1 明戸遺跡調査一覧

No.	調査期間	調査種別	調査原因	調査主体	調査面積	主な検出遺構	主な出土遺物
1	昭和41年4月20日～4月23日	試掘調査	開田に伴う新規道路発見	市	17m ²	不明	縄文土器(晩期)
2	昭和57年6月1日～6月12日	確認調査	畑作物転換に伴う土地改良に伴う確認調査	市	132m ²	竪穴住居跡、プラスコ状土坑	縄文土器(晩期)、石器
3	昭和58年5月25日～8月6日	本発掘調査	畑作物転換に伴う土地改良	市	450m ²	竪穴住居跡、墓坑	縄文土器(前期～晩期)、石器
4	平成17年4月15日	試掘調査	十和田清沢IMT基地局建設事業	市	10m ²	(遺物包含層)	縄文土器片(前期)
5	平成18年5月29日～7月14日	本発掘調査	十和田清沢IMT基地局建設事業	市	81m ²	竪穴住居跡、埋設土器	縄文土器(前期)、石器
6	平成18年10月11日	試掘調査	道路拡幅に伴う排水路の改修工事	市	20m ²	なし	縄文土器片(前期・晩期)
7	平成18年11月29日	試掘調査	集会所新築工事及びゲートボール場造成	市	10m ²	なし	なし
8	平成19年10月18日～11月26日	本発掘調査	県道戸来十和田線に伴う凍雪害防止事業	市	140m ²	竪穴住居跡、プラスコ状土坑	縄文土器(前期・後期)、石器
9	平成20年8月5日～11月28日	本発掘調査	県道戸来十和田線に伴う凍雪害防止事業	県	1277m ²	大型竪穴住居跡、竪穴住居跡	縄文土器(前期～晩期)、扶状耳飾

2. 昭和41年試掘調査報告書の概要

昭和41年に実施された、試掘調査報告書の内容は以下のとおりである。

報告書名	青森県新産地域内十和田市に所在する遺跡調査報告書	
報告者	日本考古学協会員・青森県文化財専門員	音喜多 富寿
調査員	新産地域埋蔵文化財調査員	市川金丸
	新産地域埋蔵文化財調査員	栗村知弘
	十和田市教育委員会社会教育課係長	安野茂
	十和田市文化財保護協会員	鈴木十志雄
	十和田市文化財保護協会員	鈴木進
発掘の主体	十和田市教育委員会	
	本遺跡は、昭和41年4月19日ブルドーザーによる開田作業中発見されたものであり、その大半が開墾される予定であったので、県教育委員会と十和田市教育委員会の要請により新産地域埋蔵文化財調査員市川金丸、栗村知弘、音喜多富寿の3名が次のとおり現地を調査した。	

記

調査期間	第1回調査年月日	昭和41年4月20日
	第2回	昭和41年4月21日
	第3回	昭和41年4月22日～23日

・第1号トレンチ

第1回調査は、開田工事予定地5ヘクタールのうち境界線付近の未だ工事に着手していない部分を試掘し、遺物の包含が認められたので幅1m、長さ7mの第1号トレンチを調査している。その結果、複元可能な縄文土器（晩期）が7個体、石器6点出土している。

・第2号トレンチ

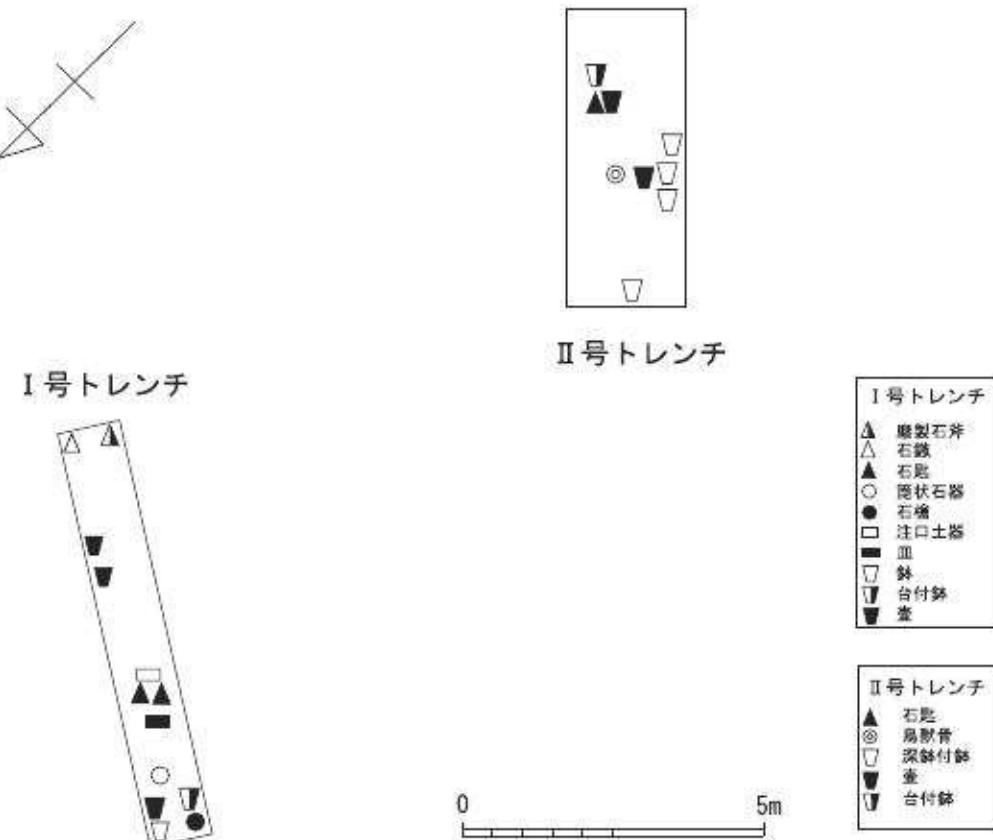
第2回調査は、開田工事予定地5ヘクタールの一部幅2m、長さ5mの第2号トレンチを調査している。その結果、複元可能な縄文土器（晩期）7個体、石匙2点、その他自然遺物として鳥獸骨5点出土している。

・第1号、第2号トレンチ以外より出土の土器、石器類

ブルドーザーによる開田作業中に発見されたもので複元可能な縄文土器は15個体あり、全てが縄文晩期であると思われる。石器は、上記の縄文土器同様に表土や開田作業中に発見され、石鎌や石匙等合計46点発見されている。



第1図 調査区位置図(1/5000)



第2図 トレンチ配置図及び出土遺物位置図(1/120)

4. 出土遺物について

今回は、調査報告書に掲載されていた実測図や写真、注記によって同定することができた土器15点を図示する。

今回図示した土器の器種は、深鉢、鉢（台付を含む）、浅鉢、皿、壺、注口である。ここではそれぞれの器種の概要を述べるにとどめる。器種や各部位名称、土器に描かれる文様などについては、弘前大学人文学部日本考古学研究室研究報告5『青森県十和田市明戸遺跡出土の亀ヶ岡式土器について』（藤沼ほか2007）を参照とされたい。

深鉢（第3図）

全体形は口縁部が内湾し、平底となる縦長の逆台形を呈する。口縁部は平縁が主となるが、小波状の装飾が交互に施されるものもある。中には正面を示すようにB突起が3単位付くものもある。胴部は縄文地となり、施される原体は単節L Rが斜位に施される。1には地文の一部に結節によって生じたと考えられる逆S字状の連續した圧痕がみられるものもある。深鉢の中には、3のように胴上部に2個1対の穿孔がみられるものがある。穿孔間には胴下部にまで至るひびが見られることから、破損した際の補修孔であると考えられる。

鉢（第4図）

全体形は、口縁部が内湾・または直立気味となる逆台形を呈する。それぞれ有文で台部を伴うもの、無文で台部を伴わないものである。5は口縁部から頸部にかけて刻み目列、沈線、正面を示すようないわゆるA突起が付く。胴・台部には、磨消部を持たず、沈線によって描かれた横S字状の配置文が描かれる。縄文地となり単節L Rが斜位に施される。6は口縁部にいわゆるB突起が付き、やや幅広となる頸部無文帯を形成する。胴上部には2個1対となる突起が等間隔で配置され口沈線や刺突列がめぐる。胴部には条痕と考えられる縦位の地文が施される。

浅鉢（第4図）

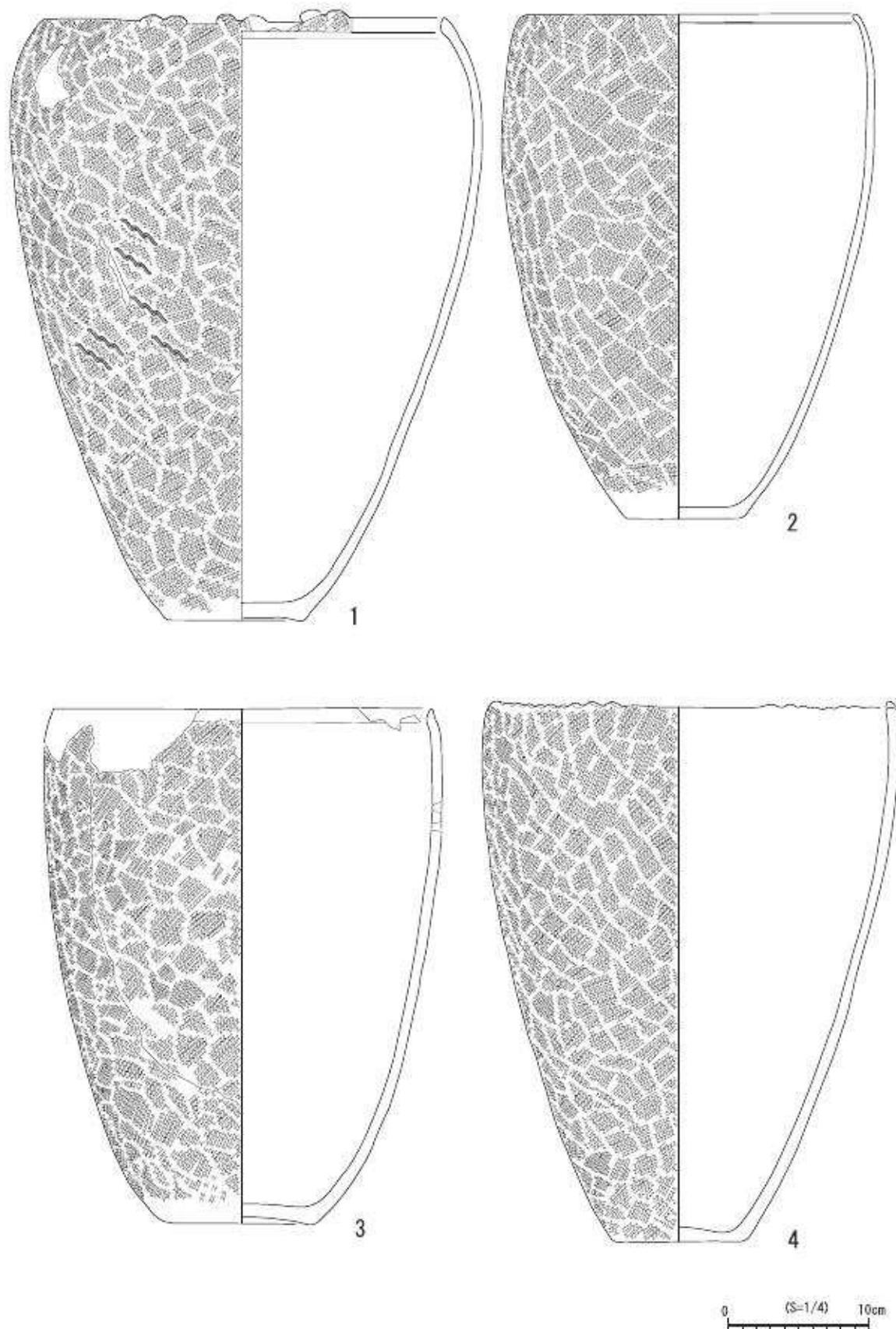
全体形は、7のように口縁部が屈曲せず外側に開き、丸底となる半球形を呈するものや、8のように口縁部が強く内湾し台形を呈するものがある。共に無地で装飾はなく、7は輪積痕が見られる。また、8の内面には赤色顔料が多量に付着しており、顔料を入れる器（バレット）として用いられた可能性が考えられる。この2点については、便宜上浅鉢として扱ったが、装飾や器形から縄文晩期におけるいわゆる浅鉢とは異なる特色を持つため、時期や用途など今後検討する必要がある。

皿（第4図）

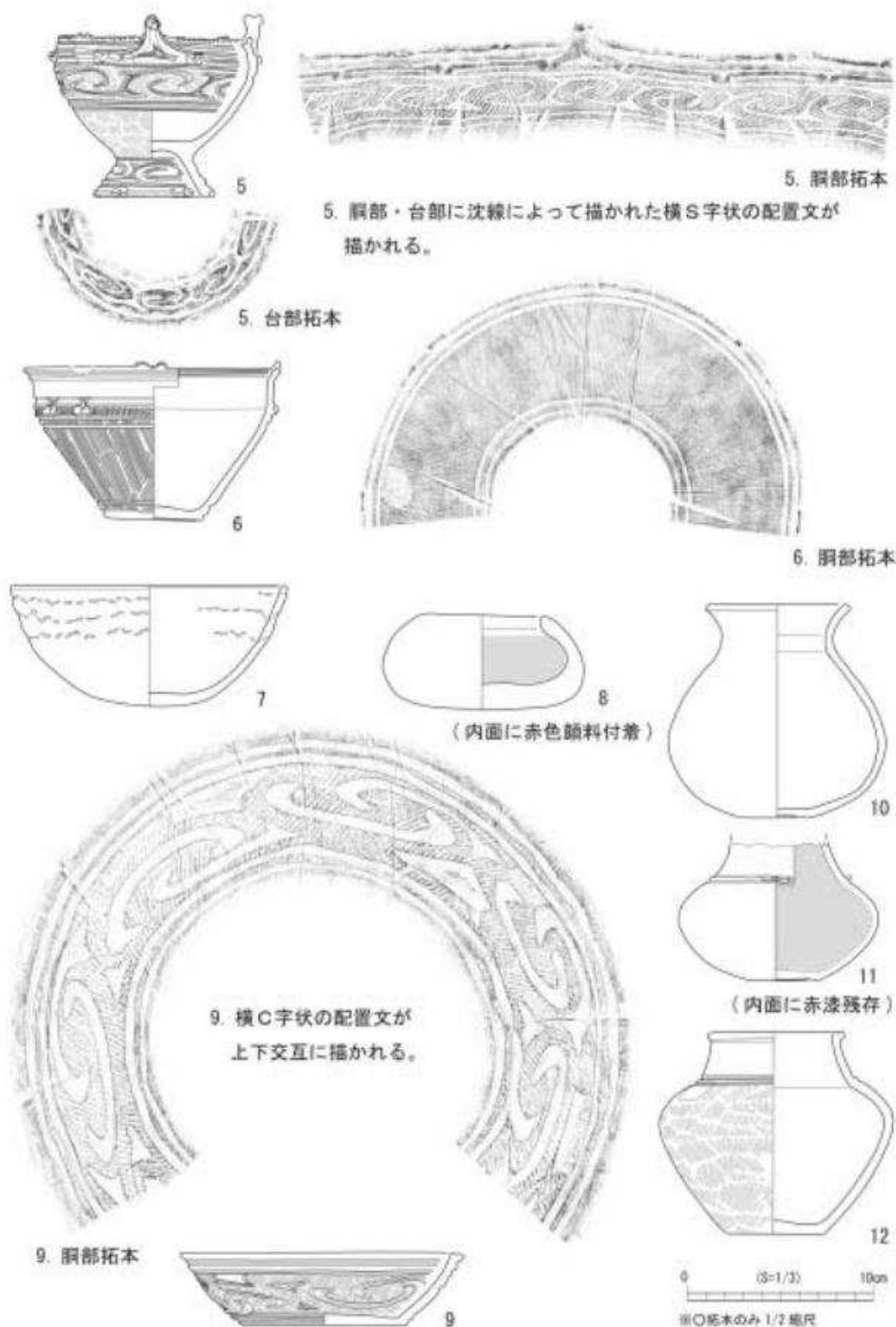
全体形は、口縁部が屈曲せず外側に開き、平底となる横長の逆台形を呈する。平縁で、口唇・口縁・底部に沈線がめぐる。有文で、胴部には横C字状の配置文、台形・三叉状の充填文が描かれる。縄文地となり単節L Rが斜位に施される。

壺（第4・5図）

壺は、器形にバリエーションがあり、口縁部から頸部は、外傾するもの、直立気味に立ち上がるもの、内側にすぼまり、逆八の字状となるものが見られる。胴部は、肩が張るもの、球形となるもの、横長の梢円形となるもの、下膨れとなるものがある。頸部には主に沈線や隆帶がめぐり、中には正面を示すようにB突起が1単位付けられる。有文のものは13の1点で、沈線と刺突列によって縦方向に区画された文様帶に逆S字状の配置文が描かれる。無地のものが主となるが、中には12のように単節



第3図 明戸遺跡出土土器（1）



第4図 明戸遺跡出土土器（2）

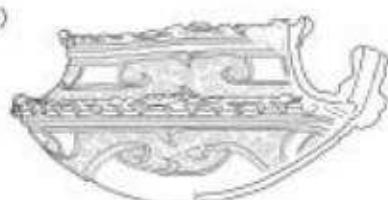


13. 汎線と割突列によって縦に区画された文様帶にS字状の配置文が描かれる。



13. 脇部拓本

14
(側面)



14. 拓本



14. 横C字状のモチーフによる配置文が描かれる。



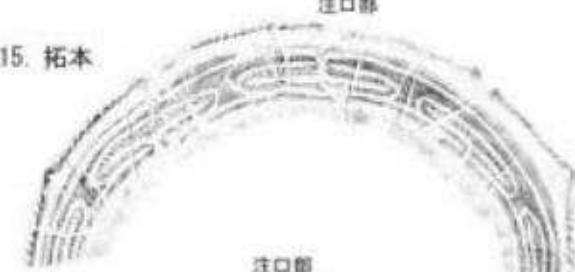
(底面)

15



(正面)

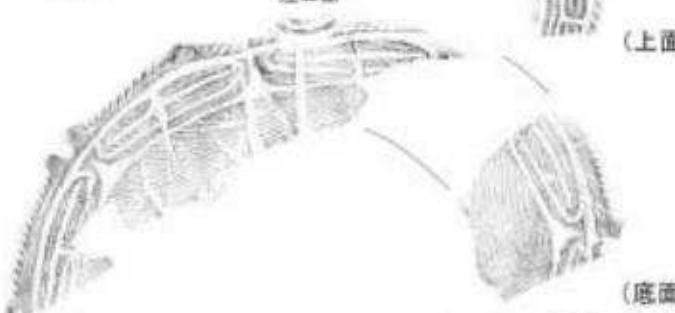
15. 拓本



注口部



(側面)



(上面)

0 (5=1/2) 10cm

第5図 明戸遺跡出土土器 (3)

LR・RLが斜位に施され、羽状縄文となるものもある。11の内面には、赤漆が多量に残存しており容器として用いられたと考えられる。

注 口（第5図）

全体形は、胴部が算盤珠状となり、口縁部が直立気味となるもの、外傾するものが見られる。14は彫り込みやB突起、刺突列によって肉形的な装飾が施される。文様は、胴上部には磨消部を持つ四角状の配置文が描かれ、胴下部には下線を持たない連続した文様が描かれる。15は刻目列や2個1対の突起によって装飾される。文様は、胴部の上下共に工字文が描かれる。地文は縄文地となり、単節LRまたはRLが斜位に施される。

表2 出土遺物観察表

番号	器種	法量(cm)				特徴	地文	炭化物	赤彩	注記
		器高	最大径	口径	底径					
1	深鉢	42.9	23.9	28.7	20.3	完形。口縁部にB突起が3単位	単節LR(一部結節)	有	無	66.11.明戸
2	深鉢	36.5	28.5	27.8	10.5	完形。口縁部内面やや肥厚。	単節LR(一部結節)	有	無	66.4 明戸
3	深鉢	35.9	26.8	24.2	8.2	口縁部一部破損。胴上部に2個1対の補修孔あり。	単節LR	有	無	66.11.14 D-1
4	深鉢	38.7	29.9	28.4	9.4	完形。口縁部が小波状と平縁交互にめぐる。	単節LR	有	無	66.11.明戸20
5	鉢	19.0	11.6	10.2	6.3	完形。台付。有文。	単節LR	有	無	66.4.20.明戸 T2
6	鉢	8.4	14.0	13.7	5.2	完形。	条痕文?	有	無	66.4.20.明戸
7	浅鉢	6.6	15.0	15.0	4.0	完形。無地。輪積み痕あり。	無	無	無	66.4.19 明戸
8	浅鉢?	5.2	11.0	6.6	6.1	完形。内面に赤色顔料入り。バレット?	無	無	有	66.明.2トレ
9	皿	4.0	15.4	15.2	9.0	完形。有文	単節LR	無	有	66.4.明戸
10	壺	11.8	11.8	7.4	2.9	完形。	無	無	無	66.明戸.T2
11	壺	(7.7)	10.9	—	3.6	口縁～頸部破損。内面に赤漆残存。	無	無	有	66.4.20.明戸
12	壺	11.1	12.7	7.3	5.2	完形。	単節LR・RL(羽状)	無	無	未注記
13	壺	11.0	12.3	5.7	<3.0>	胴下部～底部の一部破損。有文	無	無	有	66.11.明戸
14	注口	8.0	15.7	10.7	1.5	完形。有文	単節LR	無	無	66.明戸 T1.
15	注口	(9.1)	14.5	8.2	—	底部欠損。有文(工字文)	単節RL	無	無	66 明戸

()は残存値。 < >は推定値。

おわりに

今回の報告は、昭和41年の明戸遺跡試掘調査出土遺物の資料紹介である。出土土器のほとんどは、縄文時代晩期中葉大洞C1式～C2式が主体であった。本遺跡晩期の出土遺物については、昭和57・58(1982・83)年に約300個体出土しており、その際出土した遺物と比較しても、今回図示した土器と概ね同時期のものと考えることができる。

当遺跡周辺において、調査面積の大きい発掘調査はないが、これまでの試掘調査や確認調査の成果を加えることによって少しずつではあるが、明戸遺跡における当時の居住形態や生活を復元することが可能になっていくものと思われる。

＜参考文献＞

- 福田友之ほか (1988)『明戸遺跡発掘調査概報』十和田市教育委員会
- 菅田 実・福田友之ほか (1989)『明戸遺跡発掘調査報告書』十和田市教育委員会
- 大久保学・松山 力 (2007)『明戸遺跡II』十和田市教育委員会
- 藤沼邦彦ほか (2007)『亀ヶ岡文化実測図集(3)』弘前大学人文学部日本考古学研究室
- 青森県公立発掘調査機関連絡協議会ほか (2009)『平成20年度青森県埋蔵文化財発掘調査報告会資料』青森県公立発掘調査機関連絡協議会
- 大久保学・島口 天 (2009)『明戸遺跡III』十和田市教育委員会

周辺を打ち欠いた土偶

成田 滋彦（青森県埋蔵文化財調査センター）

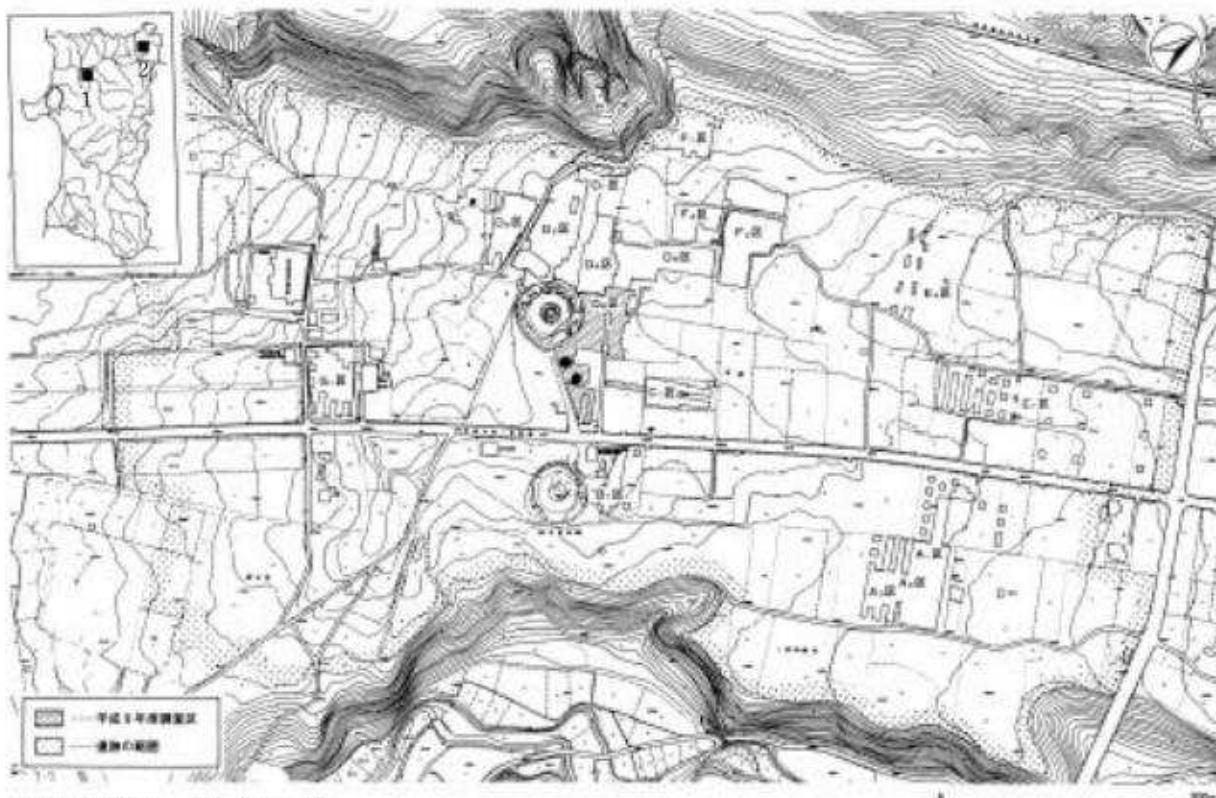
1. はじめに

平成20年12月に秋田県鹿角市に所在する大湯ストーンサークル館で、大湯環状列石出土の土偶を実見する機会があった。その際に周辺を打ち欠いた土偶を発見し、今回「周辺を打ち欠いた土偶」というタイトルで土偶2点を紹介する。

土偶破損の研究については、土偶を破損したものであるという破壊説と、自然に壊れたという非破壊説に分かれる。特に非破壊説を主導する金子昭彦は『…土偶祭式説の前提となる土偶破壊説が証明されたものではないということである。明らかに壊された土偶はない…』（金子2001）と非破壊説を主張しているが、この論は今回の資料を提示して土偶非破壊説に疑問を投げかけるものである。

2. 出土状態（図1・2）

今回紹介する土偶は、特別史跡大湯環状列石発掘調査報告書（11）（鹿角市1995）に報告されているものである。土偶の出土状態はD6区の遺構外から出土しており、図2-1はZE-94グリッドIIIaからc層、図2-2はZG-93グリッドIII A層⁽¹⁾と注記がみられる。なお図1で土偶の出土位置をドットで図示した。万座環状列石の東側に位置し、第III層中から出土した。大湯浮石層から地山直上の暗



1 伊勢堂岳遺跡 2 大湯環状列石
図は大湯環状列石発掘調査報告（11）から引用

● 土偶出土位置

図1 遺跡及び土偶出土位置図

褐色土層で、縄文時代包含層の安定した層位であると理解する。なお、紹介の土偶は報告書の記載から判断して、特異な出土状態は呈していないと思われる。

3. 土偶の様相（図2）

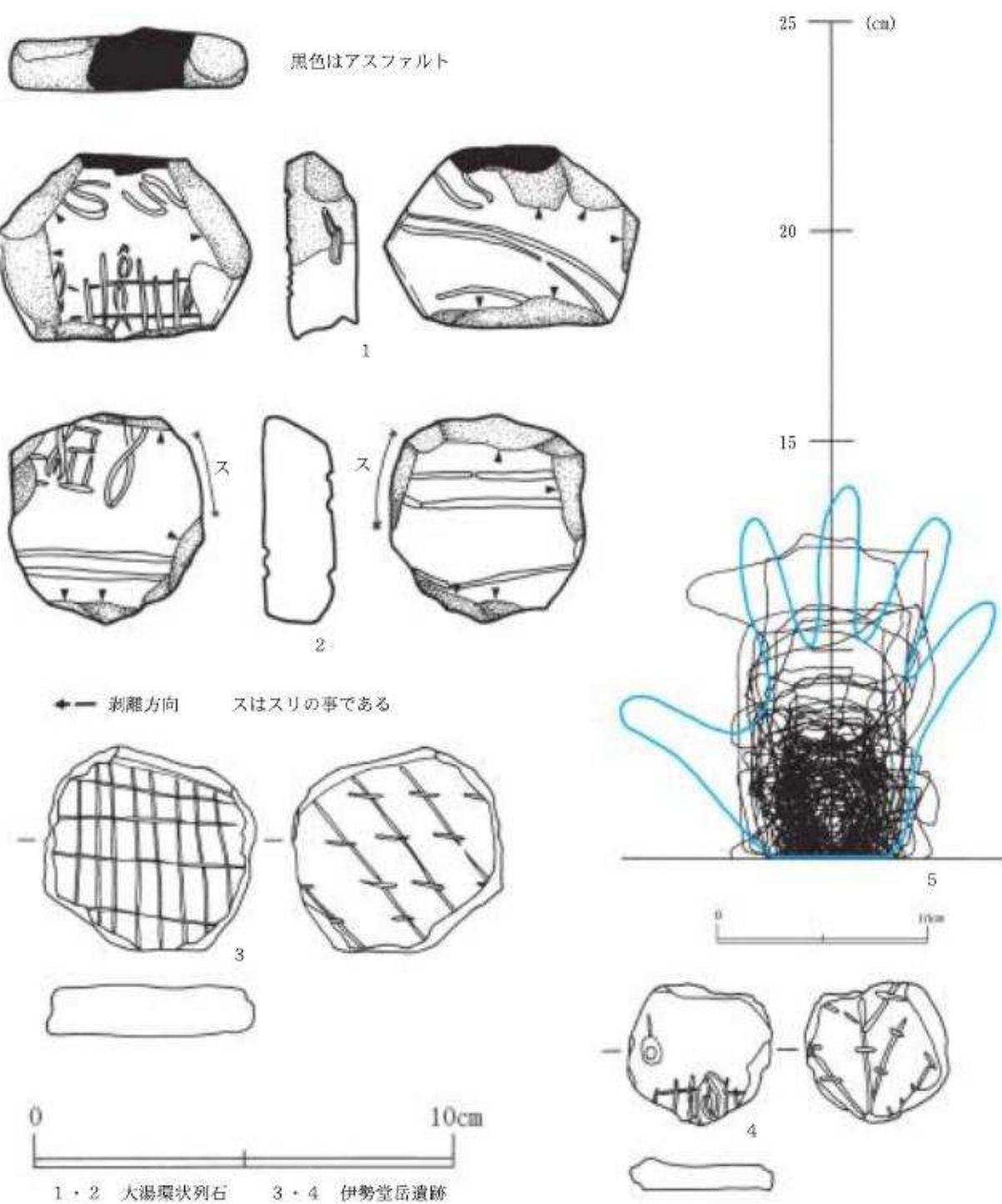


図2 周辺を打ち欠いた土偶・投影図

2個の土偶について記載する。図2-1は、土偶胸部の土偶であり、焼成は良好である。色調は褐色で黒斑がみられる。首部にはアスファルトの痕跡があり、周辺の打ち欠きは側縁部の一部を残して、両面から剥離調整をおこなっている。このことから、首部には打ち欠きをせずに両腕部と胸部下半を打ち欠いている。文様は首部の下位に横位に展開する波状文を施文しており、青森市三内遺跡の出土土偶（成田1984）と文様が類似している。残存部位は長さ6cm・幅4.4cm・厚さ1.7cmを測る。

図2-2は、臍部下半の土偶であり焼成は良好である。色調は褐色を呈している。剥離は周辺部を両面からの剥離調整をおこなっている。なお、側縁部には剥離後にスリの痕跡が確認された。残存部位は長さ5cm・幅4.5cm・厚さ1.6cmを測る。

なお、両土偶ともに土偶の製作には、粘土板を用いた二枚重ねで製作しており、混入物には砂礫を含む。図2-1は白色の石英を混入しており、混入物の差異から1・2の土偶は別々に製作したと考えられる。

この周辺を打ち欠く行為は、土器を用いて周辺を打ち欠く土器片利用土製品⁽²⁾と共通するものである。このような周辺を打ち欠く形態は、秋田県伊勢堂岱遺跡（秋田県1999）すでに指摘されていたが、注目されることはなかった。なお、当該時期に制作された切断蓋付土器（壺形の土器を切り離して制作）も、土器を壊すという行為であり、土偶の用途と関連があることが充分に考えられる。

4. 壊される土偶（図3）

本論では土偶の用途について若干まとめたいと思う。図3は大湯環状列石の土偶を投影したものである。この投影図から5～6cmの小さなグループと15cm内外の大きなグループの二つに分けることが可能である。特に小さなグループは手のひらの窪みと同一であり、今回の資料も手のひらの窪みサイズの小さなグループの範疇に入るるものである。小さなグループは土偶の一部分をのこし、他の部位はすべて粉砕するのであり、その過程は土偶本体を殺し、徹底的に葬るものであり一定の大きさの段階で祭式⁽³⁾は終了するものと考えられる。このような一連の祭式を、どこに求めるかはイエンゼンがインドネシアのセラム島西部のヴェマーレ族から採集した。ハイヌヴェレイ型神話に求めることが可能である。ハイヌヴェレイ神話を要約⁽⁴⁾すると、彼アメタはヤシの実を台の上に置いたところ夢の中で、ヤシの実を地中に埋めなさいと告げられ、ヤシの実を埋めたところ、ヤシの実は三日後に成長しヤシの花から一人の人間が表れ、彼はその娘を家に持ち帰り、ハイヌヴェレイ（ココヤシの枝）と名付けた。彼女は三日後には娘となった。この娘は用便をすると貴重な物を出したため、彼は金持ちとなつた。その後、村人に珊瑚・陶磁器類を村人の要求に求めて与えたが、逆に村人はハイヌヴェレイに対して、不気味さと嫉妬を感じ彼女を殺し生き埋めにした。ハイヌヴェレイの死を知った彼アメタは、嘆き悲しみ彼女の死体を切りぎざんで広場の周囲に分けて埋葬したところ、今までみなかつた芋が生えてきて人間たちの主食となつたというストーリーである。この神話は南太平洋一帯・アメリカのミシシッピー川流域に広まっており、吉田敦彦（吉田1986）が日本の古事記オオゲツヒメ神話及び日本書紀のウケモチ神話にみられる体のあらゆる穴から穀物をだし、最終的に殺されるもので、ハイヌヴェレイ神話と共に通するものであると指摘している。つまり、神話に表れる神はすべて女性であり、土偶がすべて女性であることから女神の可能性がたかいと思われる。この女神説に関しては、古くは鳥居龍蔵が「日本石器時代民衆の女神信仰」（鳥居1922）で土偶女神説を発表している。その後、藤森

栄一は「生殺与奪の女神」(藤森1970)であると指摘されており、地母神信仰と強い関連をもつものである。

5. おわりに

今回の2点の資料は、土偶を意識的に打ち欠いたものであるという点、土器の周辺を打ち欠いた土器片利用土製品と共に通する点、さらに切断蓋付土器と類似した面をもつ点を指摘し、用途についてはハイヌヴェレイ型神話と関連があり、従来から指摘されている地母神信仰と土偶の関連が強いといえる。

文末ではありますが、資料の実見に関して鹿角市教育委員会秋元信夫氏、大湯ストーンサークル館の藤井安之氏・三浦貴子氏にお世話をになりました記して感謝いたします。

註

- (1) 図2-2は、報告書でグリッドを記していないため、土偶に注記されているグリッド名を採用した。
- (2) 土器片利用土製品は、円板状土製品・円盤状土製品等と報告書で名称が付されているが、粘土で用いた土製品と混乱するので、あえて土器片を打ち欠いて制作しているものを、「土器片利用土製品」と名称を付すべきであると提唱したい。
- (3) 一定の段階まで土偶を破壊し、最終段階に至るまでの行為を祭式として表現する。
- (4) アードルフ・E・イエンゼンの『殺された女神』(1977)の54~58頁に記載されている神話の文書を要約したものである。

引用・参考文献

- 秋田県教育委員会(1999)「伊勢堂岱遺跡」秋田県文化財調査報告書第293集
アードルフ・E・イエンゼン(1977)「殺された女神」『人類学ゼミナール2』弘文堂
鹿角市教育委員会(1995)「特別史跡大湯環状列石発掘調査報告書(11)」鹿角市文化財調査資料52
金子昭彦(2001)『遮光器土偶と縄文社会』同成社
鳥居龍藏(1922)「日本石器時代民衆の女神信仰」東京人類学雑誌37-11
成田滋彦(1984)「青森市三内の採集土偶について」遺址第4号
藤森栄一(1970)『縄文農耕』学生社
吉田敦彦(1986)『縄文土偶の神話学』名著刊行会

原遺跡の概観

－津軽南部の終末期古墳群－

滝本 学（平川市教育委員会）

1.はじめに

原遺跡は、現在までに試掘調査も含め6次におよぶ発掘調査が実施されている。調査総面積は2,554m²におよぶが、これら発掘調査によって得られたデータは、道路建設に伴う緊急調査や狭小・散発の試掘調査等が主体であって全体的な構造や遺構展開の様相を考察するには若干不足気味の状況ではある。

しかしながら、過去の発掘調査に加えて平成19年度に実施した試掘調査で良好な資料が加わることとなったため、新たに実施された発掘調査の成果も加え情報を整理することとする。よって、ここでは現在までに実施された調査の概略を述べるとともに、遺跡の中核を成す奈良・平安時代を中心に記述する。

2. 原遺跡の位置と概略

原遺跡は、青森県平川市の北西の原地区に位置する。県道黒石－大鰐線から分岐する市道を西へ1.5kmほど進むと遺跡へと至り、付近一帯は住宅街とリンゴ園が広がる閑静な佇まいを呈している。

この辺りは、浅瀬石川によって大きく侵食されて形成された開析扇状地が分布しており、本遺跡も北側に向かって舌状に張り出した扇状地上に立地する。付近の標高は46～47mであって比較的起伏がなく極めて平坦な様相を呈しているが、旧来は南側にやや大きく傾斜する小丘状の地形であったものと考えられている。そのため、園地整備に伴い大きく削平されているものと思われる。

また、遺跡地内には「狐森」と呼ばれる直径約6m、高さ約1.5mの盛塚が残存し、盛塚頂部には付近から集められたと思われる庚申塔6基が建てられ、地元の人々によって祀られている。

遺跡が公的に認知されたのは昭和38年と比較的古いが、広く知られるきっかけとなったのは、昭和48年の春、リンゴ樹の抜根作業中に土盛塚付近から工藤仁右衛門によって腐食した刀剣が偶然に発見されたことによる。発見された刀剣は奈良時代の所産と考えられる平造りの「蕨手刀」であり、残存部分の寸法は長さ54.8cm、幅6.6cm、厚さ2.52cmを測るものとなっている。切っ先の折損と刃部の中央が部分的に欠損する以外は破損が認められず概ね原型を保っており、現在は平川市教育委員会によって保存されている。

3. 過去の発掘調査

発掘調査は試掘調査、学術調査も含め6次に及んでいる（第1図参照）。昭和62年（1987）に尾上町史編さん事業に絡み蕨手刀の出土背景を探る目的で出土したとされる地点周辺の試掘調査を実施しているが（第1次調査）確たる成果が得られないまま終了している。翌63年（1988）には、遺跡内で具体化した町道建設工事に伴い尾上町教育委員会によって緊急発掘調査（2次調査）が実施されたが、この調査で古墳（周溝）3基、竪穴住居跡1棟、溝状遺構2条、縄文時代の埋設土器遺構1基が確認

され、平成2年（1990）には、葛西勲、高橋潤によって実施された学術調査（第3次調査）で昭和63年調査部分付近の「狐森」も含め7ヶ所を調査し、10基の古墳が確認されている。

翌平成3年（1991）にも両者によって分布範囲を把握するための学術調査が実施され（第4次調査）、結果、2基の古墳が確認された。

平成13年（2001）には、遺跡の東側縁辺部、昭和63年調査地点から東側100mのリンゴ園の一角（A地点）と更に50m先（B地点）の2地点で実施（第5次調査）。A地点からは溝状遺構3条と土坑5基が検出されたが、奈良・平安期に属する遺構は検出されなかった。B地点では遺構・遺物は検出されていない。

平成16年（2002）には遺跡南西部（A地点）と西側の一角（B地点）において実施され（第6次調査）、奈良・平安期の古墳4基、時期不明の溝状遺構2条が検出されている。

4. 検出遺構と出土遺物

検出された遺構には縄文時代に属する埋設土器遺構、奈良・平安時代に属する竪穴住居跡、古墳跡、中・近世に属するものと思われる溝状遺構などがあり、出土遺物には、縄文土器（中期・晚期）、弥生土器（田舎館式）、土師器、須恵器、石器、金属製品、土製品、勾玉、中・近世陶磁等がある。ここでは奈良・平安期に属するものの詳細を記述する。

（1）竪穴住居跡

奈良・平安時代に属する竪穴住居は遺跡北西端で1棟のみ確認されている。1号住居跡は長辺5.6m、短辺5.1mを測り、カマドは北西側の壁面に設置されている。機能時期は底面出土遺物から8世紀後半に位置付けられる。

（2）古墳

古墳とみなされる遺構は、2次調査で3基、3次調査で10基、4次調査2基、6次調査4基の合計19基が検出されている。

これらは一様に円環状に廻らされた周溝で、2号・3号墳では南東部分が開口し馬蹄形状を呈している。全面的に精査が行われたものはないが、他も恐らく2号・3号墳同様周溝の一部が開口する馬蹄形状を呈するものと思われる。規模は4.9mから10.5mと定まりがなく統一性はみられない。



写真1 第16号古墳（6次調査・H19年度）

形態的には円形周溝を構築する際に生じた廃土を溝内側に盛り上げていたものと思われ、阿光坊古墳群（おいらせ町）や丹後平古墳群（八戸市）等の古墳と同様に墳丘裾部と周溝が接する土饅頭状を呈していたものと思われる。

さて、本遺跡で確認された古墳において埋葬施設が検出された例は少ない。2号・3号墳で埋葬施

設と思われる掘り込みが確認されているが、両者搅乱を受けており詳細は不明となっている。

一方で16号墳では埋葬施設を確認するため周溝内部を実施したものの、痕跡は認められておらず、1号墳等多くのもので埋葬施設が現時点では確認できていない。

周溝底面より浅く造られたことにより、後の削平によって消失したとの考えも可能であるだろうが、埋葬施設が検出されない事例は、阿光坊古墳群や丹後平古墳群等にもみられるため、むしろ構造的なものと考えた方が良いものと思われる。

地山面に掘り込んだ痕跡が認められないところから、あるいは墳丘内に埋葬施設を構築した可能性も否定しきれない。後世の削平により墳丘とともに消滅したとするならば、その推測も成り立つものと思われる。

古墳は出土遺物や遺構内から検出された白頭山火山灰の関係から8～9世紀にかけて造営されたとみられる。したがって本遺跡の古墳は終末期古墳と判断される。

なお、2号墳では埋葬部分と考えられる掘り込み周囲の土壤を用いて無機磷酸の含有量と残存脂質の脂肪酸組成の分析が行われているが、分析結果により高等哺乳類の埋葬が示唆されている（小山陽造1988）。

(3) 出土遺物

古墳に伴うものと思われる出土遺物は多くないが、第3号墳の周溝から土師杯が1点、第5号墳bの周溝から故意に破損させ積まれて置かれたと思われる横瓶、第6号墳の周溝から土師器杯・甕、須恵器杯、高台付杯、壺、丸玉が出土している。丸玉は透き通ったスカイブルーを呈したガラス製で直径3mmと小さく中央に径1mmの穿孔が施されているものである。これらは周溝内部の開口部に集中しており、状況から意図的な投棄とみられる。



写真2 銅（丸柄）（6次調査・H19年度）

遺構外の遺物として特筆するものに銅

（丸柄）、勾玉等がある。6次調査で出土しているが後世の搅乱により遺構と伴出しなかつたが、これらは明らかに古墳に伴う遺物である。丸柄は青銅製であり、津軽地方においては初見となっている。

なお、第2次調査で出土した須恵器片の蛍光X線分析を試みているが、その結果、静岡県湖西地方の須恵器の胎土の特性とほぼ同質とみられることが判明している。報告書内では湖西窯跡群が有力な产地として考えられるとしており、今後の検討課題となっている。

5. 古墳造営域と居住域について

古墳の分布範囲は、遺跡北西にある「狐盛」周辺と6次調査地点より確認されているため、遺跡南西部まで分布することが明らかとなっているが、遺跡南東部と西側で実施された5次調査においては

奈良・平安期の遺構自体が確認されていない。北東部では調査が及んでいないものの、古墳は遺跡西側に濃密に分布する傾向のようであり、比較的広域な範囲に分布すると推測されるものの、遺跡東側への展開は脆弱なものと考えられる。北東部に関しては調査未実施のため今後の調査による追加資料を待ちたい。

次に居住域についてであるが、竪穴住居跡は遺跡北西部で1棟確認されているだけで、その他の調査地点からは検出されていない。住居跡は床面から出土した遺物と堆積土中から検出された白頭山火山灰から8世紀後半に位置付けられている。この住居跡は古墳と並行するものと思われるが1棟のみに止まっている状況から本遺跡内での住居の展開は稀薄なものと推測される。

したがって、トレンチ調査が多く面的な調査が進行していない状況下ではあるものの、この状況から古墳が分布すると思われる遺跡西部においては古墳造営域と居住域は混在されることなく分離しているものと判断される。

また、遺跡の西側に隣接する浅井（1）遺跡からは竪穴住居跡が2棟確認されている。これらは出土遺物やカマド構築方法等から原遺跡1号住居と同時期の年代が示されている。したがって、両遺跡においてほぼ同時期の竪穴住居跡が存在しており、200m程度という両者間の距離関係からいっても分離された別集団のものとの判断し難いものと思われる。このことから原遺跡の古墳造営集団の居住域は、現段階で原遺跡西側及び隣接する浅井（1）遺跡を含めた範囲である可能性が高いものと推測される。

6. 現までの調査から

本遺跡は縄文時代から近世に跨る複合遺跡であり、遺物の出土量と遺構数から奈良・平安時代が最も隆盛したものと思われる。奈良期には終末期古墳が多数造営されるため墳墓遺跡としての性格を有している。

調査は分散して実施されており、全容を知るにはまだ調査面積に不足があるものの、遺跡の主体となる終末期古墳は遺跡の北西部から南東部にかけて検出されており、この範囲を中心に古墳は分布するものと推測される。それに対し居住域は古墳と混在せず両者は明確に区別されるものと思われ、最も近接する住居域としては本遺跡の西端から隣接の浅井（1）遺跡にかけて存在するものと予想される。

遺跡内に所在する盛塚（狐盛）以外にも盛塚が多数あったと伝えられていることや限定された範囲での調査に終止しているにも係らず、現在までに19基の古墳が確認されていること等から本来一帯には数多くの古墳が存在したものと推測されるが、残念なことに古墳の墳丘部分には盜掘や園地整備等に伴う削平により、ほとんど失われてしまったものと思われる。

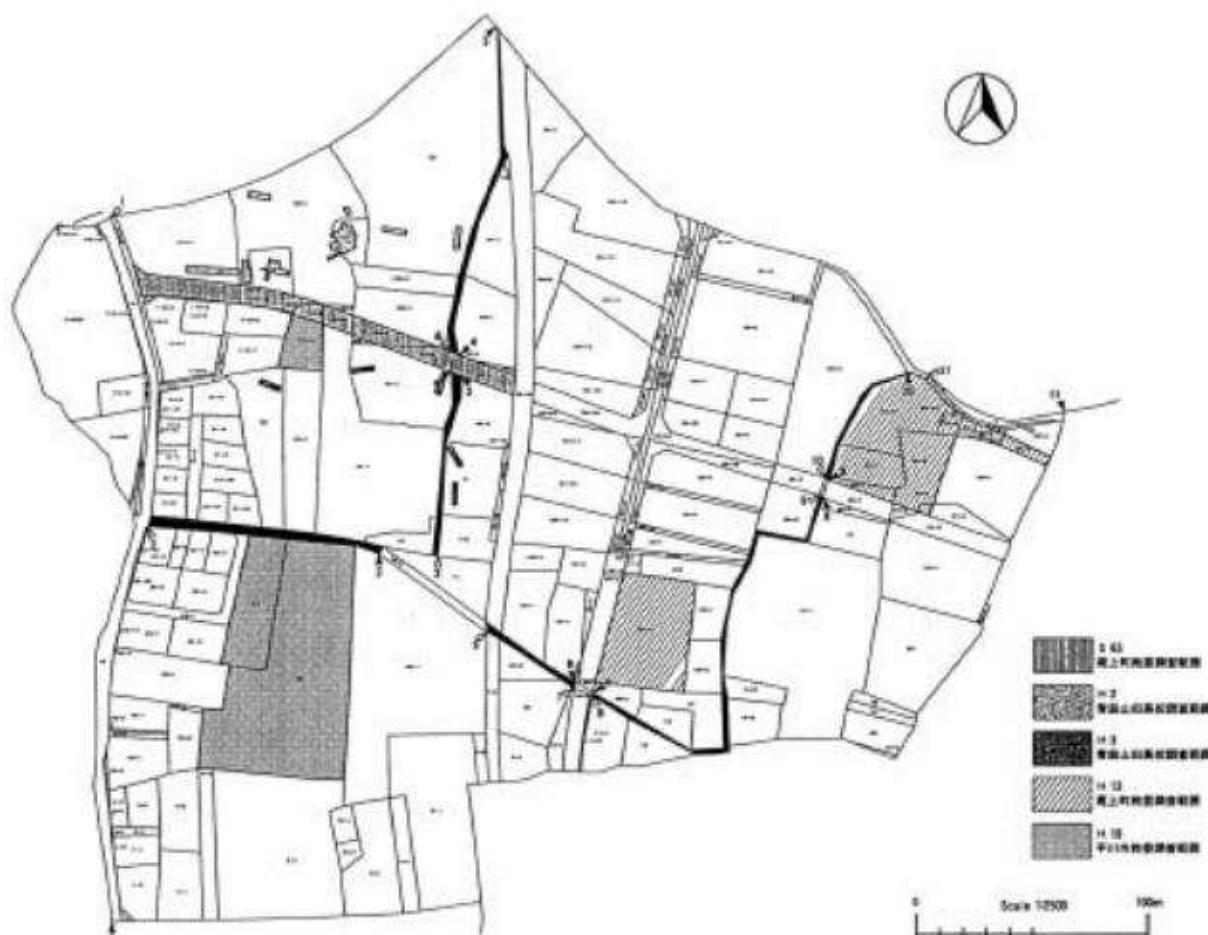
原遺跡は津軽地方で数少ない終末期古墳が存在するものであり、この地域における終末期古墳文化を考察する上で欠かすことが出来ない重要な遺跡となっている。

また、本遺跡が所在する舌状扇状地は、浅瀬石川流域に発達した肥沃な土壤を有し、古来、人間生活を営む上で良好な条件を備えていたものと思われ、付近に李平（1）遺跡、李平（2）遺跡、五輪野遺跡、八幡崎遺跡等の同時期の遺跡が分布している。本遺跡は、地理的にこれら遺跡のほぼ中間に位置するところから、本遺跡の正しい理解のためには、隣接する浅井（1）遺跡をはじめ周辺遺跡も

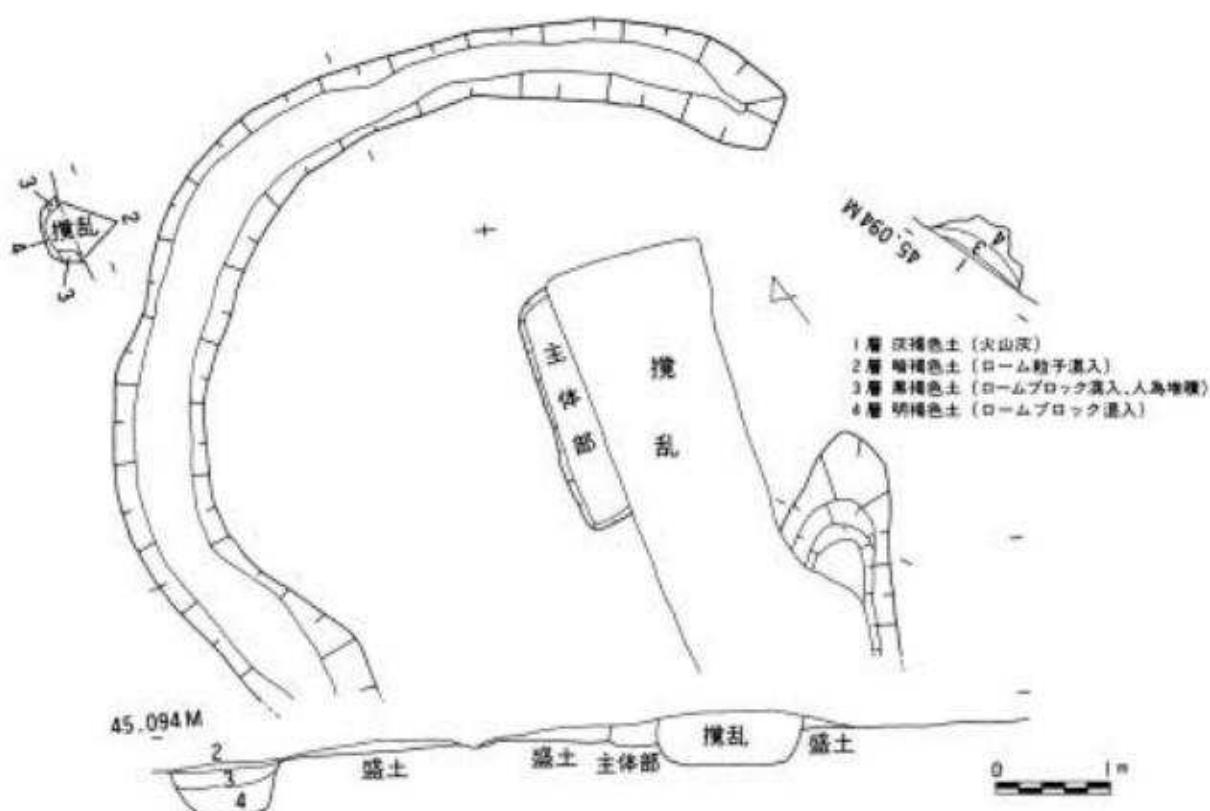
含めた広域的な検討が望まれるところである。

【引用・参考文献】

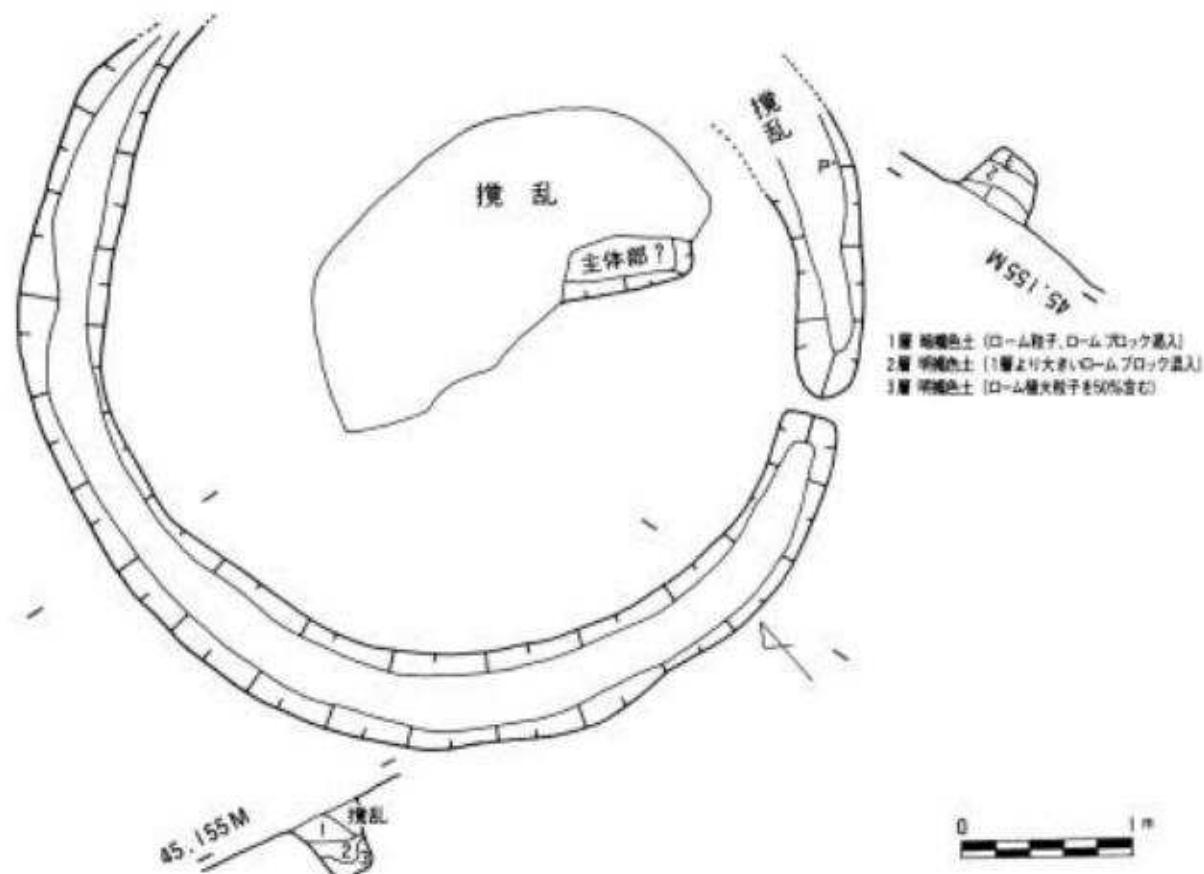
- 葛西勲・高橋潤 (1989) 「原遺跡発掘調査報告書」 尾上町調査報告書第8集
尾上町教育委員会
- 葛西勲・高橋潤 (1990) 「東北北部における終末期古墳の研究」
『拠糸文』第18号 青森山田高等学校考古学研究会
- 高橋潤 (1992) 「東北北部における終末期古墳の研究」
『拠糸文』第19号 青森山田高等学校考古学研究会
- 高橋潤・相馬俊也 (2001) 「浅井（1）遺跡試掘調査報告書」
尾上町文化財調査報告書第10集 尾上町教育委員会
- 相馬俊也 (2002) 「尾上町埋蔵文化財試掘調査報告書 原遺跡 李平遺跡 浅井（1）遺跡」
尾上町文化財調査報告書第11集 尾上町教育委員会
- 長尾智寿 (2008) 「原遺跡試掘調査報告書」
平川市埋蔵文化財調査報告書第3集 平川市教育委員会



第1図 原遺跡調査地点図



第2図 第2号古墳実測図（2次調査・S63年度）



第3図 第3号古墳実測図（2次調査・S63年度）

掘立柱建物跡からみた十三湊の社会構造と安藤氏像

中村 隼人（青森県埋蔵文化財調査センター）

1. 序

（1）目的

青森県五所川原市に所在する十三湊遺跡は在地領主安藤氏によって營まれた中世港湾都市として知られる（竹内1973）（図1）。同遺跡は継続的な発掘調査開始段階に国立歴史民俗博物館によって三ヶ年の発掘調査がなされ、十三湊の盛期を対象とした都市域の復元案（以下歴博想定図）が作成された（図2）。現在青森県教育委員会と五所川原市教育委員会によって行われている継続調査はこの歴博想定図を指針としたものだが、発掘資料の蓄積は歴博想定図の更新の必要性を生んだ。

本稿では十三湊の盛期である14世紀末から15世紀初頭を対象年代とし、掘立柱建物跡の用途特定から往時の十三湊都市域の景観復元を行う（新想定図の提示）。次いで都市景観復元の過程で得られた副次的な知見から、十三湊の社会構造と安藤氏像についていくつかの仮説を提示する。

（2）研究史

《歴博想定図》

開館以来、国立歴史民俗博物館では歴史関連諸学の研究者が共同研究を行い多くの成果を挙げてきた。総合課題「北方日本における文化交流」の研究対象に選択された十三湊では、史料類の収集も含め多面的な調査が行われ、その成果として歴博想定図が作成された⁽¹⁾（国立歴史民俗博物館1995）。歴博想定図は遺跡北部の宗教施設と領主館を核とする極めて求心性の高い同心円構造を持つ。これは領主館と宗教施設を都市域中央に配し、周辺域に家臣団や富裕層の居住域、外縁に商人や手工業者らの生活域が計画されたとする中世城館都市の構造を十三湊の地形に代入したものと指摘することもできる（高橋1993）。

《都市域の範囲と移動》

榎原滋高は出土遺物の年代から、十三湊には安藤氏移入以前にも前潟部分に小規模な集落が存在し（13C中）、その後安藤氏の移入に伴う港湾機能の拡充によって盛期（14C後～15C前）を迎えたと推論した。加えて南部氏侵攻（1432）を契機に遺物の出土分布が大土壘の北側から南側へと大きく移動することに注目し、都市域の移動を指摘した（宇野1994・榎原2004）（図3・表1）。また高島成侑は南部氏侵攻以前に都市域として使われていた大土壘北側の地区において、街区整備を伴う大規模な町割が存在したことを明らかにした（高島2005a・高島2005b）。

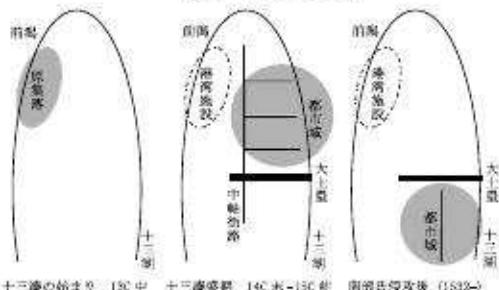
2. 十三湊の都市空間

（1）概説

本章では復元がなされた建物跡の用途特定を行い、これを拡大延長し都市域の景観復元を行う。なお本稿では十三湊都市域をA～Cの三地区に分類し考察を進める（図4・表2）



図1 十三ヶ所位置図



十三ヶ所の始まり 13C 中 十三ヶ所筋 14C 末~15C 初 南朝兵侵攻後 (1582)

図3 十三ヶ所都市域の移動

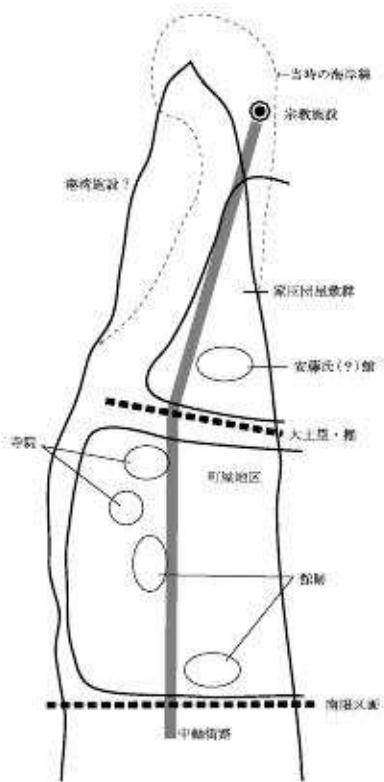


図2 国立歴史民族博想定図（当初想定図）

表1 十三ヶ所・安藤氏歴史

城郭	年代	都市場	跡記事項	史料
坂堀	13C 中	前堺	前堺に源氏系が存在	54次調査等
	13C 後		安藤氏の移入	十三往來
発展	13C 後	前堺、土岐北	土岐北側に「の」字型の宮殿跡	B地区調査
盛期	14C 後-15C 初	前堺、土岐北	領主主導の町割形成	A、B、C地区調査
	1432		南北氏侵攻の安藤氏城内へ退去	南北氏毎日記
	1432+		安藤氏-十三ヶ所筋と都市場移動	17、71次調査
衰落	1436-1447	前堺、土岐南	若狭守護十一代頼の首治	若狭守護記
	1442		南北氏侵攻と安藤氏城内へ退去	新羅之記跡
新築	15C 後		飛砂の堆積による海岸標高低下	31次調査等

表2 各地区名と調査次数

地区名	調査次数	整備想定図での性質
A地区	10・11・15・16・71・91	奈良回廊施設
B地区	9・18・75・95・120	奈良回廊施設
C地区	36・87	安藤氏近館、奈良回廊施設

表3 各地区的代表的な建物跡

形式	条件	A地区(77棟)	B地区(99棟)	C地区(102棟)	総分比率	全体比率
1	梁1	31棟(41.4%)	29棟(29.3%)	42棟(41.2%)	37.7%	
2a	梁2×桁2、單室	10棟(13.0%)	28棟(28.3%)	1棟(0.9%)	3.4%	29.1%
2b	梁2×桁3以上、單室	19棟(24.7%)	1棟(1.0%)	3棟(2.9%)	6.0%	
2c	梁2×桁3以上、複室	45棟(58.4%)	10棟(10.1%)	19棟(18.6%)	19.5%	
3	梁3以上×桁3以上	7棟(9.0%)	13棟(13.1%)	5棟(4.9%)		6.6%
4	三面庇、内面庇	2棟(1.1%)	0棟(0.0%)	0棟(0.0%)		0.5%
5a	梁2・檼柱	17棟(21.8%)	25棟(25.2%)	16棟(15.7%)	15.3%	19.3%
5b	梁3以上・檼柱	9棟(11.0%)	8棟(8.1%)	7棟(6.8%)	3.9%	
6a	不明	44棟(57.0%)	16棟(16.2%)	5棟(4.9%)		16.6%

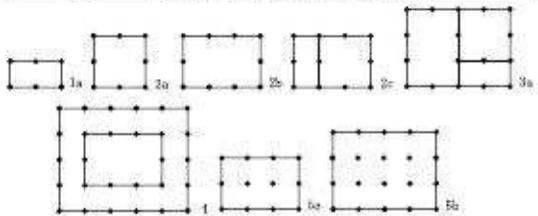


図4 調査次数と本稿での名称

(2) 全体の傾向

十三湊都市域内で復元された建物を形態と間取りによって分類し、その分布と比率を確認した（表3）。分類条件には以下の基準を採用した。なお復元建物のうち、調査区内に全体が収まらず規模や間取りを特定できない建物に関しては不明（6類）に分類した²⁾。

- 1　：梁間一間
- 2 a : 梁間二間×桁術二間 単室
- 2 b : 梁間二間×桁術三間以上 単室
- 2 c : 梁間二間×桁術三間以上 複室
- 3　：梁間三間以上×桁術三間以上
- 4　：三面庇・四面庇
- 5 a : 梁間二間の縦柱
- 5 b : 梁間三間以上の縦柱
- 6　：不明

梁間二間以下の小型建物の全体比率が圧倒的に高い。梁間三間以上の大型建物は極めて稀で、都市域内の建物規模に明確な格差がなかったことが解る。また建物規模や屋敷構えを権力表現の為の装置と解釈するならば、都市域内の住人間に顕著な階層差はなかったと考えてよい（小野1997）。

(3) 建物跡の用途特定

《平均的な住人が生活した住居》

都市域で確認される建物は梁間二間の建物（2類・5類）が多勢を占める（図5）。この梁間二間の建物は、十三湊に限らず多くの中世遺跡で確認され、大型建物との対応関係がない場合、用途は住居と特定される（土本2003）。港湾都市である十三湊の場合、集住人口の過半は港湾施設で労働に従事した人足や水夫であったと考えるべきだろう。よってここでは2類の建物跡の用途は人足水夫の住居であったと仮定したい。十三湊では彼らが生活した床を持たない住居（2類）とそれに伴う小型の付属屋（1類・5a類）が都市景観の基調をなす。

《港湾管理者の住居》

十三湊では基本的に同じ場所に同形式の建物が連続して建て替えられる事がない。つまり特定地域が一定期間同一用途で継続利用されることとは稀だった（高島2005b）。しかし三間×三間程度の中型建物（3類）はB地区北半に分布が集中する。このことから考えると3類の建物はある程度意識的に配置されたと考えられる（図6・表3）⁽²⁾。

なお3類の建物の用途には住居を想定したい。複数の室によって構成されるこの建物は、柱を抜き二間×X間の部屋を作るなど、都市域の建物群の中では比較的大空間を意識している。また3類の建物はその周辺に井戸や柵列、小型の付属屋（1類・5a類）を伴い確認される（図5）。定型化ないし定数化することはないが、3類の建物とこれらの施設には緩やかなセット関係が形成されている点も推論の遠因とした。またその利用者だが、ここでは港湾施設の管理者層を想定したい。B地区北半の建物規模と屋敷構えの様相は人足水夫の居住地のそれに比べ若干勝る。つまり利用者の階層は十三湊住人の中でも上位に位置したと考えてよい。

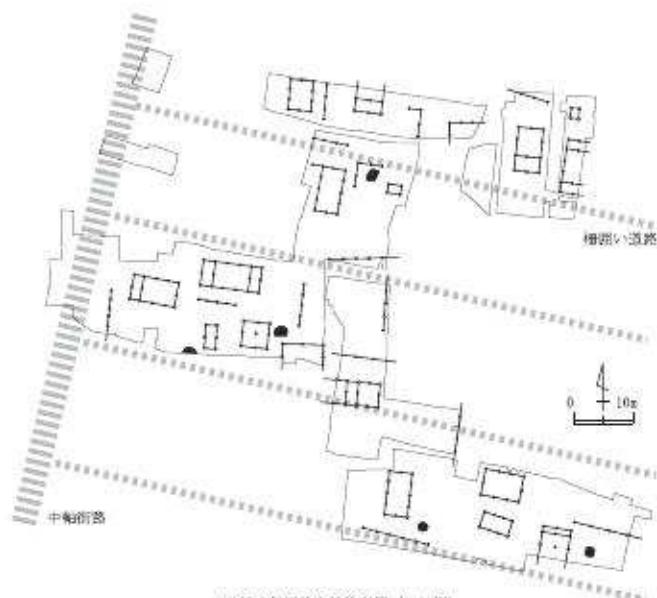


図5 各地区的代表的な建物配置 (A-11期)

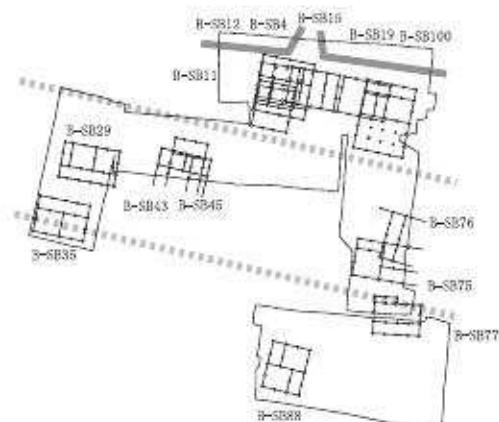


図6 B地区で確認される中型建物の分布

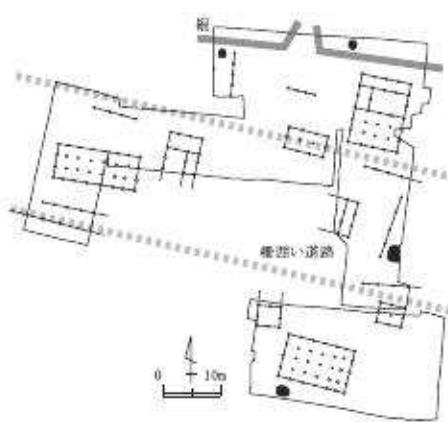


図5 各地区的代表的な建物配置 (B-14期)

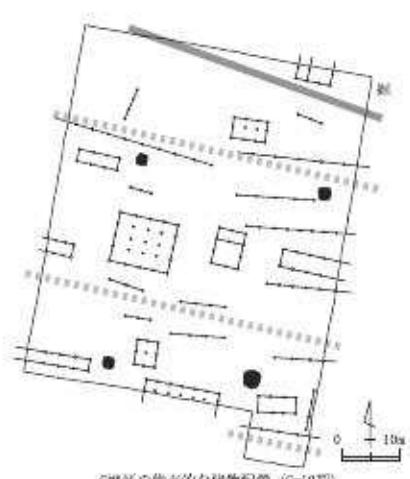
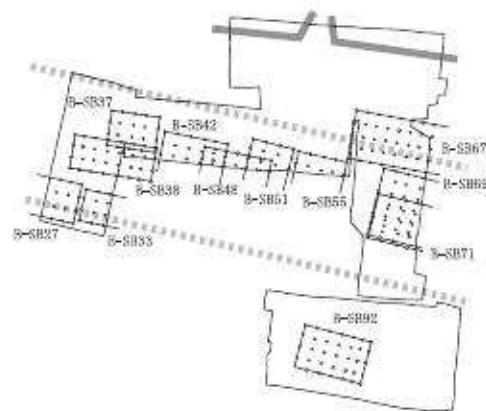


図5 各地区的代表的な建物配置 (C-12期)

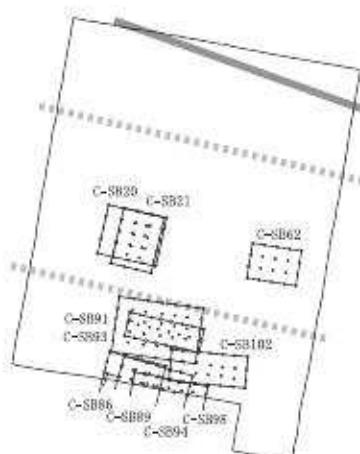


図7 B・C地区で確認される大型柱建物の分布

ただし人足水夫を上回る階層という条件だけをして、安藤氏ないしその家臣団の居住域と特定するのは安易だろう。B地区北半の景観は都市域内の中でも異質ではあるが、突出して規格性が高いわけではない。そして、なにより十三湊都市域で確認される3類の建物に対面儀礼を実現しうる空間はない。武士階層の住居と積極的に判断するには決め手に欠ける。

《大型倉庫》

梁間三間以上の大型総柱建物（5b類）も例外的に、B地区南半とC地区南半に分布が集中する（図7）。5b類の建物もある程度意識的に特定地区に配置されたと考えられる。

5b類の建物の柱穴は総じて大きく深い。しかしそれはあくまでも十三湊都市域内の他の柱穴と比べ大きいという程度で、同時期の周辺遺跡の柱穴と比し優越しているわけではない。これらの柱穴を用い高床の建物が作られたと考えることや、束を建て床を張ったと考える事は難しい。なおその用途だが、大型の倉庫を想定したい。総柱建物は内部に大空間を持たないことから本質的に住居に適さない。また十三湊都市域内の5b類の建物では側周り一間の柱間寸法が変化せず、縁や底としての利用が想定できない。以上の理由から、5b類の建物は間取りや床を持ち得なかつたと判断し、大型倉庫としての利用を想定した。

（4）都市域の景観

一般的に中世港湾都市の中央部には商施設であった市や社寺門前が配置される。しかし十三湊の都市域ではこれらの商施設が確認できない。また在地領主が拠点とした城館都市の場合、都市域中央には支配層の屋敷地と宗教施設が配置される。しかし十三湊においてはこれらの施設配置も確認されない。

十三湊の都市域は基本的に小型で簡素な建物が建ち並ぶ平坦な景観である。建物や屋敷構えに階層性が反映されると解釈するならば、都市域内の住人間に明確な階層差は存在せず、小型の建物が建ち並ぶ景観同様、平等かつ平坦な社会が形成されていたと考えてよい。

この地で積極的な商行為が行われ、富の移動と蓄積がなされたと考えた場合、住居もそれに比例して大型化し贅を尽くしたものになるだろう。しかし都市域内の小型建物は、言ってしまえばただ寝る為だけの目的で作られたのではないかと思わせるほどの最小限のものである。十三湊の平均的な住人（人足水夫）は、この地に定着しようとしていなかつたかのように見える。前述した商施設の欠如とあわせて考えると、十三湊の都市景観は港湾機能に特化したものだったと考えてよい（図8）。十三湊の都市域は人が集住するという点において都市的な様相を示している。しかし、消費の場としての都市的様相は持ちえなかつた。

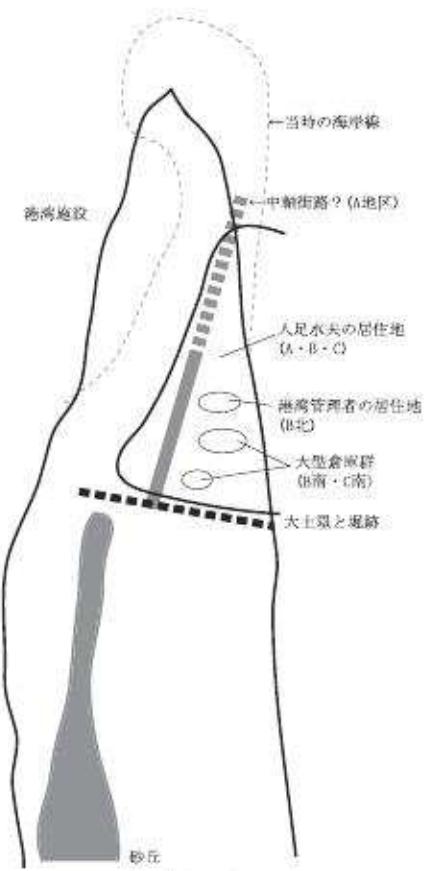


図8 十三湊盛期の都市域

3. 十三湊の社会構造

(1) 概説

次に都市景観復元の過程で得られた副次的な知見から、十三湊住人の注意意識と社会構造についていくつかの仮説を提示したい。

(2) 土地の所有意識

《無秩序な屋敷割と屋敷構え》

屋敷割という概念が存在し、継続的な土地利用がなされたと考えた場合、主屋のあった場所には主屋を、附属屋のあった場所には附属屋をというように、同じ用途の建物が同じ場所に何度も建て替えられる景観が想定できる。しかし、十三湊では同一地区に同型式の建物が何度も建て替えられることがない。また隣地境界を示していたはずの境界柵は変遷の後期にいたっても一ヶ所に定着せず、大きく移動する。以上の条件から考えると十三湊では屋敷割という概念が極めて曖昧なものだったと考えられる⁽³⁾⁽⁴⁾。

また同一地区に同一人物ないし同族が長期間定住したと考えた場合、主屋、付属屋、柵、井戸等各施設の配置や数量、規模に著しい変化が生じることは稀だろう。しかし十三湊では大きく移動する境界柵内に配置された各施設の数量的なセット関係（屋敷構え）が定数化することもない。このことは同一地区に同一人物が継続的に生活していなかった可能性を示唆する。

つまり十三湊の都市域では建物や土地（不動産）の個人所有意識が極めて希薄であり、かつそこに住む住人の入れ替えも頻繁に行われていた可能性が高い。

《住慣行の確立》

支配層主導で普請された広範囲に及ぶ町割を持ちながら、十三湊都市域では屋敷割や屋敷構えに規格が生じることがない。つまり十三湊の支配層は町割の計画と普請を実現したものの、土地利用の細部に対しては規制を設けず、被支配層の自治に委ねていたと考えてよい。しかし変遷の後期にいたっても屋敷割が定型化しないことや、共有地であるはずの道路上に建物や柵等の施設が作られる景観から考えると、十三湊では住人主導の住慣行の確立もなされなかつたと考えられる⁽⁵⁾⁽⁶⁾。

(3) 生業と季節性

《掘立柱建物の耐用年数》

十三湊都市域内で確認される柱穴群はすべからく小さく浅い。一棟の建物を長期間にわたり利用していたと考えるには難しい貧弱な柱穴ばかりが確認される。都市域内の掘立柱建物の耐用年数は試算によると5年程度となる⁽⁷⁾（表4）。これは青森県内の中近世遺跡で確認される掘立柱建物の耐用年数としては際立って短い。建物の耐用年数の短さは、都市域内の建物の仮設性の高さをしめす。そしてまたその利用者に一棟の建物を頑健に造り、長期間利用するという発想が存在しなかつたことを伝える。十三湊都市域内の建物は簡単に造られ、簡単に朽ちることを前提とした建物だった。

表4 青森県内の中近世遺跡における掘立柱建物の耐用年数

遺跡名	年代	推定及過去期数	推定耐用年数
小沢館	14C後葉-17C初葉	10期	約30年
猿間館	13C後葉-16C中葉	12期	約30年
野瀬遺跡	13C後葉-17C初葉	11期	約30年
中崎館	13C後葉-13中葉・15C初葉-16C初葉	3期・4期	約25年・約30年
赤羽堂遺跡	13C後葉-14C中葉・17C初葉-19C初葉	3期・6期	約30年・約30年
輪越遺跡	16C初期-17中期・17C後葉-19C初期	6期・5期	約10年・約30年
普通遺跡	16C末-17C初期	1期	約30年
十三湊遺跡	14C後半-15C成半	終30期	約5年

十三湊遺跡以外の遺跡に関するデータは佐々木他1999・佐々木他2000・佐々木2000を参考した
※十三湊遺跡のみ異なる計算方法を採用した

表5 近世酒田における大船の入津数

	1787(天明七年)	1796(寛政八年)
1月	-	-
2月	-	-
3月	25	58
4月	2	84
5月	2	67
6月	38	-
7月	16	-
8月	34	232
9月	-	-
10月	-	4
11月	5	鉄船
12月	因船ノミ	鉄船

単位：艘

《厳寒期の河川水運機能停止》

現在、十三湖の湖面の大半は厳寒期には凍結する。

十三湊が盛期を迎えた14世紀後半から15世紀前半は現在と比べ1.2°C程度気温が低かった(ト浦2001)。このため十三湊盛期においても現在同様湖面は凍結していたと考えられる。つまり厳寒期の十三湊は川湊としての機能を失っていた。

《厳寒期の港湾機能停止》

また北方交易において蝦夷地側の主要生産物であった鱈や鮭、昆布や海獣の皮革類は冬季に収穫加工され春先に出荷される(石川1973)。このため危険を冒してまで無理に厳寒期の蝦夷地に向け船を出す必要はなかった。

近世日本海交易を代表する庄内酒田湊では冬季間大船の入津数が減少し、厳寒期には船運そのものが途絶えた(酒田市1981・山口2005)(表5)。年代が十三湊の盛期から下るため単純な比較はできないが非常に興味深い。諸条件から類推すると、十三湊の港湾機能は河川水運機能同様、季節性に大きく依存したと考えられる。

《住宅の仮設性と労働者の雇用形態》

十三湊の河川水運機能と港湾機能が厳寒期に停止していたとするならば、十三湊の住人達は冬季間どのような生活を送っていたのだろう。

当然十三湊にも農業や漁労による生産性が存在し、消費の場としての需要も存在しただろう。しかし復元がなされた十三湊の景観は港湾機能に特化した異質なものである。十三湊を介して生産される富の大半は物流に大きく依存したものであり、その他の生業による収入や消費活動による利益は僅かなものだったことを伝える。つまり厳寒期に生じる河川水運機能と港湾機能の停止は、十三湊の生産性と存在意義を大きく減少させるものだった。また十三湊の港湾機能が季節性に依存するものだったとすると、その労働者達の労働形態も通年性を持つものではなく、季節雇用的なものだったと予測できる。十三湊の港湾施設で労働に従事した人足水夫は現在でいう季節労働者的存在であり、一年を通じ都市域内に定住していなかった可能性は高い。そしてだからこそ、十三湊都市域の土地利用は極めて曖昧なものであり、建物は高い仮設性を持ったと言い換えることもできる。厳寒期の十三湊では港湾機能のみならず、都市域全体が冬季間放置されていた可能性すら十分に想定できる。

(4) 領主館の所在

《同時代の周辺遺跡で確認される主殿》

十三湊盛期と同時期に周辺遺跡で確認される主殿級の建物には

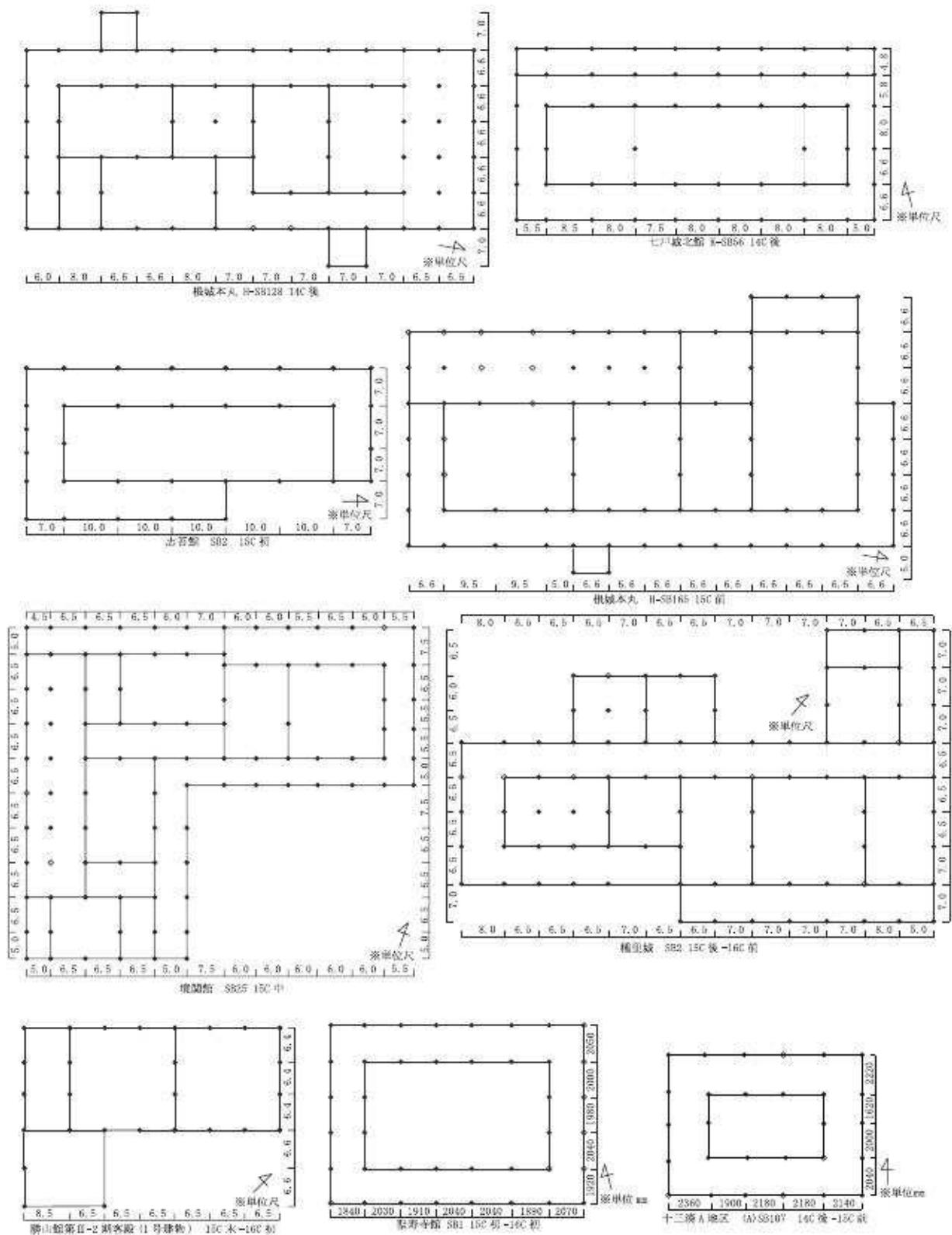


図9 十三棟盛期と同時代の周辺遺跡でみられる主殿級の建物跡

- 1) 身舎は基本的に一列構成（直屋）。
 - 2) 出入り口と推定できる突き出しがある（中門の模倣）。
- という寝殿造系住宅特有の特徴を持つ（図9）。

中世中期から後期は寝殿造系住宅から書院造系住宅へと上層住宅の形式が移行する期間と捉えてよいが、14世紀後半から15世紀前半の青森県及び道南地域では、寝殿造系住宅の影響が大きかったことがわかる（高島1983・高島1986）。

《都市域内に領主館が存在した可能性》

十三湊都市域内には安藤氏の領主館と即断しうる建物跡が確認されない。そもそも三面以上の庇が廻るような建物自体が稀で、A地区で二棟確認できるのみである（表3）。ただしこの二棟の建物を領主館と推定するには違和感が残る（佐々木2000）。この二棟の建物は間取りこそ最低限の格式を感じさせる建物ではあるが、柱穴の規模や深さ、間尺の統一感などの複数の条件が、都市域内で確認される他の掘立柱建物に優越することはない。つまり部材や工法等の待遇が都市域内の他の建物と同程度であったことをしめしている。そしてそれは同時に建物を建てた人間の中に、この建物に対する優先意識が存在しなかった事をしめしている。

そもそも大規模な町割の普請を実現したほどの権力と財力をもった往時の安藤氏が、簡素な主殿しか持ち得なかつたと考えることが難しい。都市域内に領主館は無かつたと考えるべきだろう。

《都市域外に領主館が存在した可能性》

堺や博多などの中世港湾都市では都市域内に領主館が確認されない。これは港湾都市の都市域中央部が基本的には商業地であり、市や社寺門前に占められていたことを背景とする。基本的に中世港湾の支配層は都市域内に領主館を形成せず、その周辺に居を構えた。十三湊都市域内に領主館とそれに付随する家臣団の屋敷地と比定できる地区は確認されない。しかしこれは中世港湾都市の景観としてはむしろ一般的なものだった（宇佐美2001・大庭2003・續2003）。

《都市域周辺の安藤氏関連遺跡》

十三湖北岸に位置する福島城では、平成17年度以降青森県教育委員会によって継続的な発掘調査がなされている。平成20年度調査では七間×七間と五間×五間の身舎を持つ二棟の大型建物が確認された。また同じく十三湖北部に位置し、五所川原市教育委員会が調査を進める山王坊遺跡の平成20年度調査では、東西七間×南北五間の身舎の北面に東西三間×南北二間の突出を持つ礎石建物と四間×九間の身舎を持つ礎石建物が確認された¹⁰⁾。福島城と山王坊で検出される遺物類の年代は十三湊盛期と同時期のものであり、両遺跡はともに安藤氏関連の遺跡と考えてよい。

両遺跡で確認された大型建物の存在は、往時の十三湊に建築に対する十分な知識とそれを実現しうる財力が存在した事を証明する。そしてまた両遺跡で確認される質の高い建物は、逆説的に安藤氏が十三湊都市域をいかなる場として認識していたのかを示すものである。

安藤氏は十三湊都市域に大型の建物を建てられなかつたのではない。意識的に建てなかつたのだろう。安藤氏にとって十三湊都市域は館や宗教施設等の拠点施設を設ける場として意識されていなかつたのではないだろうか。

4. 結 安藤氏像

支配層にとって触れを発し、都市を修景する行為は権力という不可視なものを可視化させる好機だった。しかし復元がなされた景観は、安藤氏が十三湊都市域をなんら操作しようとしていなかったことを伝える。安藤氏は被支配層に対し、主従関係を示威するような行動をとっていない。

支配層と被支配層の関係が濃密ないし緊張状態にあった場合、支配層は意識的に関係性を誇示する行為を選ぶだろう。しかしその関係性が一過性の疎遠なものであった場合、その関係性を強調するようなことはしない。安藤氏にとって十三湊都市域は権力表現の場ではなかった。物流の結節点として実利の獲得を優先した商業地という認識だったのでないだろうか。復元がなされた十三湊の都市景観は、安藤氏の商人的様相を色濃く伝える。

謝辞

なお本稿執筆に際し元八戸工業大学教授高島成侑先生、八戸市市史編纂室佐々木浩一氏、青森市市史編纂室工藤清泰氏、青森県教育委員会鈴木和子氏、五所川原市教育委員会榎原滋高氏、青森県埋蔵文化財調査センター工藤忍氏、茅野嘉雄氏、斎藤慶史氏から多くの御教示を賜った。ここに記し深甚の謝意を表します。また本稿を執筆する機会を与えてくださった青森県埋蔵文化財調査センター成田滋彦氏、白鳥文雄氏にも同じく深謝の意を表します。

註

(1) 中世期の十三湊の地形に関しては市立函館図書館蔵「十三絵図」(1648(慶安元)年)が基準資料になっている。この絵図にみられる当時の海岸線は、現在の海岸線と大きく異なる。国立歴史民俗博物館1995では「十三湊のある砂州の頭部(北部)は現代と大きく形状を異にするが、これは、この部分が後に潮水によって削られたためで、現状では砂州頭部は東北側が小さくなり、また西側にあった凹部が逆に埋まっている。そこにあった神社もその後南方へ移転しているが、この絵図はそうした点についての変化が起きる以前の、おそらくは中世とほぼ同じ状況を描いていると見ることができる」とし、この絵図にみられる海岸線の形状を想定復元図に反映している。

(2) 表3の分類条件については鈴木2008を参考にした。

(3) 土本俊和は都市生成の理念系には「地割先行型」と「建物先行型」という二つのモデルがあるとし、「建物先行型とは敷地割を踏まえず土地の上に建物がまず建つ形成過程である。対して、地割先行型とはあらかじめ設定された敷地割に規定される形で建物が建つ形である」と定義した(土本2003)。つまり土地所有の概念(地割・屋敷割)が先んじて存在し、これに従う形で建物の配置がなされたのか(地割先行)。あるいは建物に対する個人所有の概念が先んじて存在し、ここから派生して隣地境界の概念が芽生えたのか(建物先行)という所有意識の前後関係を理念化したわけだが、十三湊で確認されるそれは土本のいう建物先行型そのものである。

(4) 土地の所有範囲が収入や税収額に直結する農村や大都市では土地の個人所有意識の形成が比較的早い(伊藤2002・西谷地2002)。

(5) 国立歴史民俗博物館1995では、盛期の十三湊では近世城下町において計画的に採用された短冊形地割が既に形成されていたと推論している。しかし建物復元とそれに伴う土地利用の実態からは「短冊

形地割」以前に規格化された屋敷割（地割）が確認できなかった。なお十三湊都市域内における短冊形地割の有無に関しては玉井1994・藤田1999などがある。

(6) 十三湊では道路上に建物や柵、井戸が造られる等、道割を無視した景観が形成されるが、これは中世都市の景観として珍奇なものではない。中世鎌倉や応仁の乱後の下京等でも多く確認される（小川1988・野口1988・堀内2001・早見他2004）。これらの大都市域においてもこの現象が確認されるということは、十三湊のような地方の小都市においてはより恒常に確認されたと考えて大過ない。

(7) 佐々木他1999・佐々木他2000・佐々木2000で考察対象にあげられた各遺跡の掘立柱建物跡の耐用年数に関しては、単純に《遺跡の年代幅 ÷ 変遷図の時期数（建物の建て替え回数） = 建物の耐用年数》で試算した。対して十三湊本報告書掲載の変遷図に記載された掘立柱建物は、変遷図の複数の時期数にまたがり存続する建物跡も多い。このため《遺跡の年代幅（100年） ÷ 変遷図の時期数（約30回） × 1.5（複数期存続する建物跡に対する補正） = 建物の耐用年数（約5年）》で試算した。なお表4にあげた遺跡の多くは館跡であり、図9で挙げたような大型建物が確認される場合もある。しかし技術者が造ったと推定できるような大型建物の存在は全体比の中では少数に過ぎず、基本的には十三湊都市域で確認されるような建築の知識を持たない素人でも造ることが容易な二間×三間程度の建物が主体をなす。以上の理由から比較の対象たりえると判断した。

(8) 本文中で記載した福島城および山王坊で確認された建物跡の規模は、あくまでも両遺跡現地説明会資料の表記に準じたものである。今後も継続される発掘調査の成果によって間取りや規模等の解釈が改変される可能性は大いにある。

参考文献

- 青森県教育委員会(2007)『福島城3』青森県埋蔵文化財調査報告書第460集
青森県教育委員会(2008)『平成20年度福島城跡発掘調査の成果』発掘調査現地説明会資料
青森県埋蔵文化財調査センター(1987)『境関館遺跡』青森県埋蔵文化財調査報告書第102集
鰐ヶ沢町教育委員会(1995)『種里城址Ⅲ』鰐ヶ沢町文化財シリーズ第12集
上ノ国町教育委員会(2006)『史跡上之国勝山館跡整備事業報告書Ⅰ(客殿周辺地区調査)』
国立歴史民族博物館(1995)『青森県十三湊遺跡・福島城跡の研究』国立歴史民族博物館研究報告書第64集
五所川原市教育委員会(2008)『平成20年度山王坊遺跡発掘調査の成果』発掘調査現地説明会資料
酒田市(1981)『亀ヶ崎足軽目付御用帳』『酒田市史 史料篇第8集』
市浦村教育委員会・山王坊跡調査団(1987)『山王坊跡』
七戸町教育委員会(2006)『国史跡七戸城跡－北曲輪発掘調査総まとめ報告書－』
南部町教育委員会(2002)『聖寿館跡発掘調査報告書Ⅷ』南部町埋蔵文化財調査報告書第12集
函館市教育委員会(1986)『史跡志苔館跡』
八戸市教育委員会(1993)『根城－本丸の発掘調査－』八戸市埋蔵文化財調査報告書第54集
文化財建造物保存技術協会(1994)『史跡根城－主殿復元工事報告書－』
石川松太郎校中(1973)『庭訓往来』平凡社
伊藤俊一(2002)「中世後期の土地所有」『新体系日本史3土地所有史』山川出版社
宇佐美隆之(2001)「津・市・宿」『新体系日本史6 都市社会史』山川出版社

- 宇野隆夫(1994)「日本海に見る中世の生産と流通」『中世都市十三湊と安藤氏』新人物往来社
- 大庭康時(2003)「戦国時代の博多」『戦国時代の考古学』高志書院
- 小川保(1988)「近世都市における宅地の境界とその変遷」『建築史論叢』中央美術出版会
- 小野正敏(1997)「城下町、館・屋敷の空間と権力表現」『国立歴史民俗博物館研究報告書第74集』
- 榎原滋高(2004)「十三湊の都市構造と変遷 発掘調査十年の成果から」『中世十三湊の世界—よみがえる北の中世—』新人物往来社
- 坂田泉(1984)「山王坊遺跡の復元の一考察」『北方日本海文化の研究』東北文化研究所紀要第16号
- 佐々木浩一他(1999)「青森県中世遺跡の遺構変遷試案ー小沢館・境関館・野脇遺跡・中崎館ー」
『八戸市博物館研究紀要14号』
- 佐々木浩一他(2000)「青森県中世遺跡の遺構変遷試案(2)ー赤御堂遺跡・鞍越遺跡・浜通遺跡」
『八戸市博物館研究紀要15号』
- 佐々木浩一(2000)「青森県中・近世遺跡の景観ー小沢館・境関館・浜通遺跡・十三湊遺跡・種里城ー」
『青森県史研究5』
- 鈴木和子(2008)「十三湊遺跡」『都市を比較するー東アジアの都市と住宅ー』第15回中世都市研究会資料集
- 高島成侑(1983)「東北地方北部の中世城郭にみられる掘立柱建物跡について」『八戸工業大学研究紀要3巻』
- 高島成侑(1986)「浪岡城北館の掘立柱建物跡について」『八戸工業大学工業大学研究紀要5巻』
- 高島成侑(2005a)「十三湊遺跡における掘立柱建物跡の復元とその変遷」『十三湊遺跡V』青森県埋蔵
文化財調査報告書398集
- 高島成侑(2005b)「十三湊遺跡における掘立柱建物跡の考察」『十三湊遺跡V』青森県埋蔵文化財調査
報告書398集
- 高橋康夫他編(1993)『図集日本都市史』東京大学出版
- 竹内理三編(1973)「廻船式目」『鎌倉遺文5』東京堂出版
- 玉井哲雄(1994)「十三湊の都市空間についてーその立地と地割ー」『中世都市十三湊と安藤氏』新人物往来社
- 續伸一郎(2003)「戦国時代の自治都市堺ー発掘調査からみた環濠都市遺跡ー」『戦国時代の考古学』
高志書院
- 土本俊和(2003)『中近世都市形態史論』 中央公論美術出版
- 中村隼人他(2005)「掘立柱建物跡からみた中世十三湊遺跡における社会構造の可能性」『日本建築学会
計画系論文集592号』
- 西谷地晴美(2002)「中世土地所有研究の視点」『新体系日本史3土地所有史』山川出版社
- 野口徹(1988)『中世京都の町家』東京大学出版
- 早見洋平他(2004)「地割に先行する仮説と移築ー16世紀末京都における隣地境界線の生成過程ー」
『日本建築学会計画系論文集578号』
- 藤田裕嗣(1999)「考古学との接点としての地割ー前川報告によせてー」『歴史地理学 No.192』
- ト藏建治(2001)「地質時代～現代の気候変動」『青森県史 自然編 地学』
- 堀内明博(2001)「市・町の形態と展開ー平安京・京都を中心としてー」『考古学発掘資料による建物の
復元方法に関する基盤研究』科学技術振興機構研究助成金研究成果報告書
- 山口博之(2005)「脇本城と出羽南部の海と城」『海と城の中世ー東北中世考古学叢書(4)ー』高志書院

青森市近野遺跡・野辺地町櫛ノ木(1)遺跡の未報告土偶・土製品 －副題 土偶は分配されたのか－

成田 滋彦（青森県埋蔵文化財調査センター）

1 はじめに（図1）

今回紹介する土偶・土製品は、昭和50年の近野遺跡の調査と、平成5年の櫛ノ木(1)遺跡の調査によって出土した資料である。当時は掲載外として取り扱われ、当センターの特別収蔵庫に保管されていた。今回、未報告の土偶・土製品を新たに実見する機会があり、再度観察する機会があった。あらためて未報告の土偶・土製品を実見すると、縄文時代における祭祀遺物にとって重要であり貴重なものであると認識した。そのため新たに本文にて報告するものである。なお、他の土偶・土製品については、すでに近野遺跡は青森県教育委員会刊行の青森県埋蔵文化財調査報告書第33集に報告され、櫛ノ木(1)遺跡は青森県教育委員会刊行の青森県埋蔵文化財調査報告書第169集に報告されている。

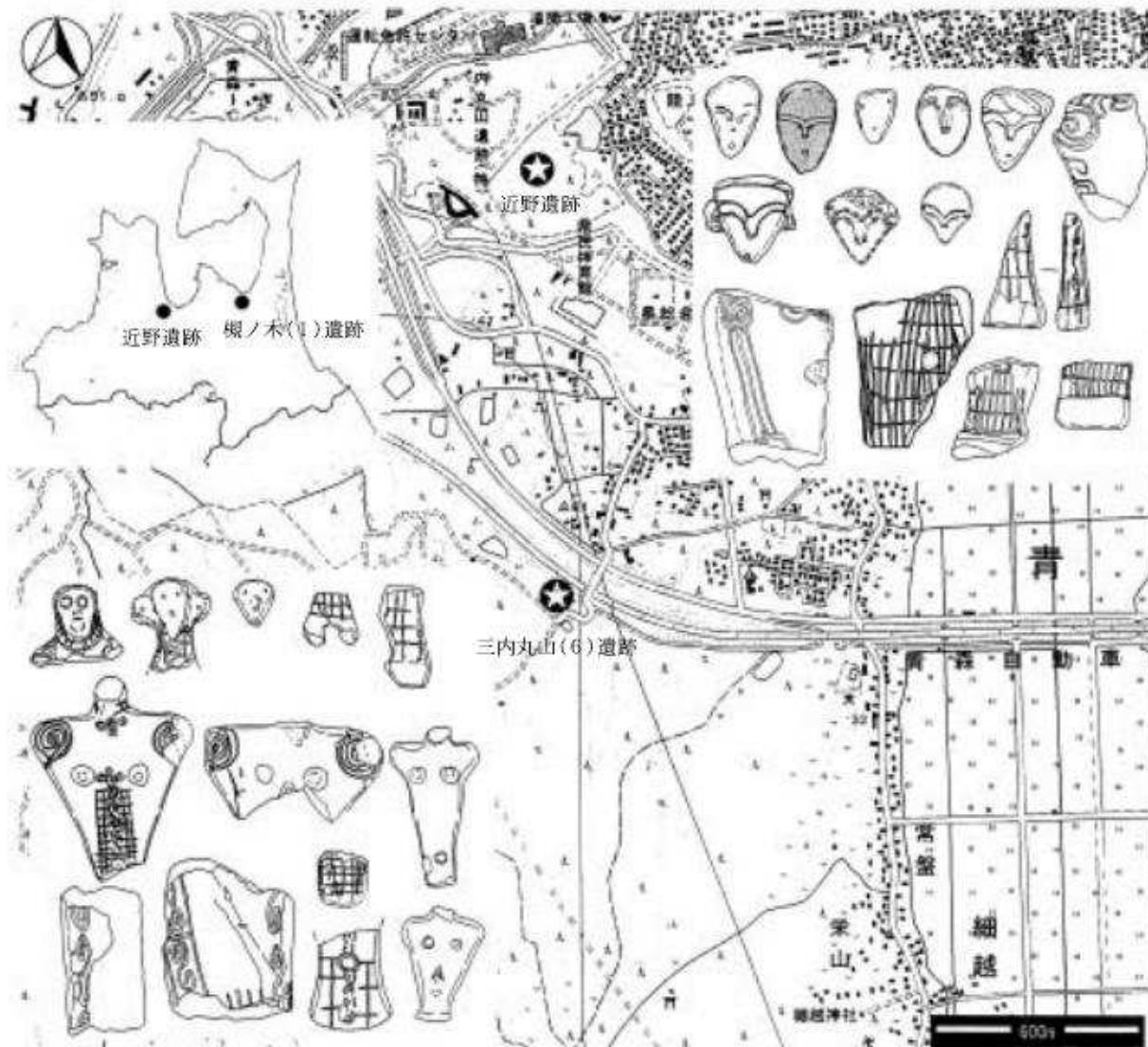


図1 近野遺跡・櫛ノ木(1)遺跡・三内丸山(6)遺跡位置図

また、近野遺跡に関連して、近距離に位置する三内丸山（6）遺跡の土偶と比較・検討をおこない、土偶が分配されたのかというテーマで記載する。

2 近野遺跡遺跡出土土偶

今回報告する資料は、昭和50年の調査によって出土した資料である。土偶35点・三角形土偶2点・人面付土器2点・キノコ形土製品1点・土版1点・異形土製品3点・土器片利用土製品1点の計45点である。

土偶（図2-1～14・図3-15～25・図4-26～35）

土偶製作時における粘土板は一枚で製作（9）、上下を重ねて製作する二枚重ね（4・6）・左右を重ねて製作する二枚重ね（14・18）、芯を中心として左右に重ねていく三枚重ね（19）が確認できるが、二枚重ねで製作するものが多い。混入物は石英の混入の割合が多い点が指摘できる。焼成は一般に良好、色調は焼成時における黒斑が多く全体的にくろっぽい色調を呈するものが多い。整形は幅0.5cmの細い工具を用いて、ヘラナデ調整をおこなっており、特に乳房部周辺のヘラナデは顕著である。（5）は表裏面に剥落痕跡がみられる。焼成時のハジケか二次的（人為）な剥落なのかは判断できなかった。（4）は首部・（5）は腕部の破損面が楕円形に窪んでおり、部位を接合するソケットと思われる。（8）は首部に黒色物質が確認されアスファルトの可能性も考えられる。形態は全体の形態を知り得る資料がないので、各部位毎に記載する。顔部は頭頂部が平坦であり、頸部がとがった逆三角形で無文であり顔部表現はみられない（1）。腕部は湾曲したタイプ（5）・（8）と、腕部が平行なもの（4）・（6）がみられる。胴部は内側に屈曲するものが多い。脚部は足部をゆうし立脚形のもの（30・32～35）と足部をもたない十字形のもの（23・27～29）の形態であり二種のタイプが存在する。（8）・（10）・（11）は胸部に斜位の貫通孔が確認され（6）は紐ずれ痕跡が確認される。文様は横位と縦位が交差する格子状文（6・9・24）・連続した渦巻文（13）・単独の渦巻文（7）が施文されており、格子状文が多い。格子状文の施文手順には、縦位→横位（4・6・9）と横位→縦位（24）の施文の相異があり、つくり手の違い（作り手のクセ）がみられる。また（16・19・25）の刺突文は、東北地方南半部の南境式に多く用いられている技法であり、南半部における他系統の技法を本地域で土偶に採用している。（17）は臍部を中心として一段低くなっている、腹部部分を強調している。次段階の妊婦土偶の先駆けとなるものである。製作時期は（3）が縄文時代中期の円筒上層d・e式であり、他は縄文時代後期の十腰内I式期に相当すると思われる。

三角形土偶（図4-36・37）

（36）は先端部が丸みをもつものであり、残存部から三角形を呈すると思われる。色調は暗く厚さは2.3cmと厚い。文様は渦巻文様を施文している。なお、辺部寄りには幅0.3cm・長さ1.3cmの溝があり製作時の空気孔と思われる。（37）は色調が暗褐色で全体に暗い色調を呈する。粘土板は二枚重ねで制作している。調整の表面ははっきりしないが、裏面にはヘラナデが一部確認できる。全体の形態から顔面をイメージできるが、対の窪み周辺に幅の狭いヘラナデが確認できる。このヘラナデは十腰内I式の時期に製作された土偶（近野遺跡には多い）の乳房部の周縁に多々みられる⁽¹⁾ことである。窪みは乳房部を貼り付ける窪みであると理解したい。形態は三角形であり頭頂部の辺はやや中央部が窪む、先端部は丸みをもち両端部は一部欠損があり剥がれている。乳房部は粘土・臍部は貫通孔で表している。

近野遺跡

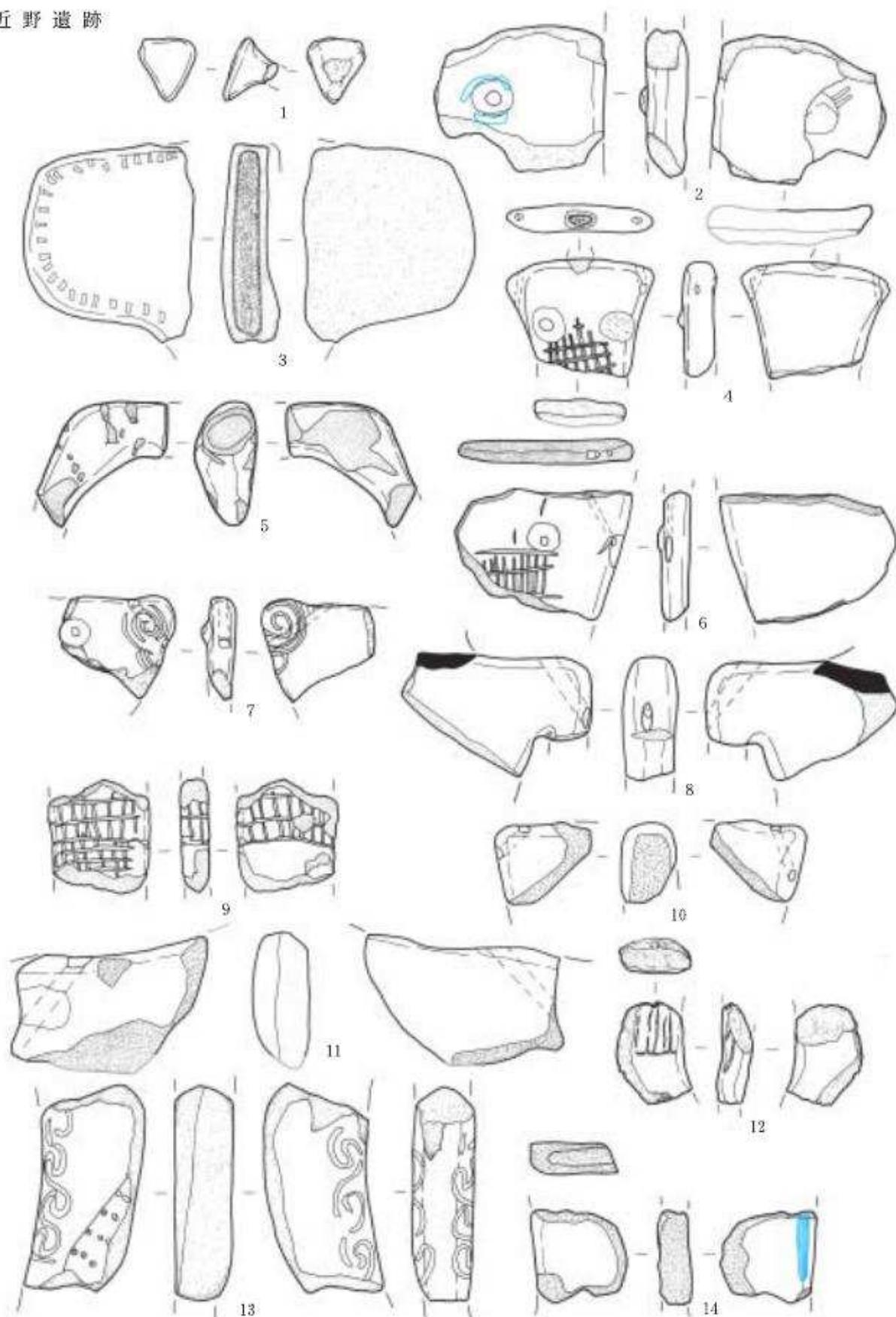


図2 近野遺跡土偶図 (1)

黒印 アスファルト
青印 ヘラナデ調整

縮尺2分の1

近野遺跡

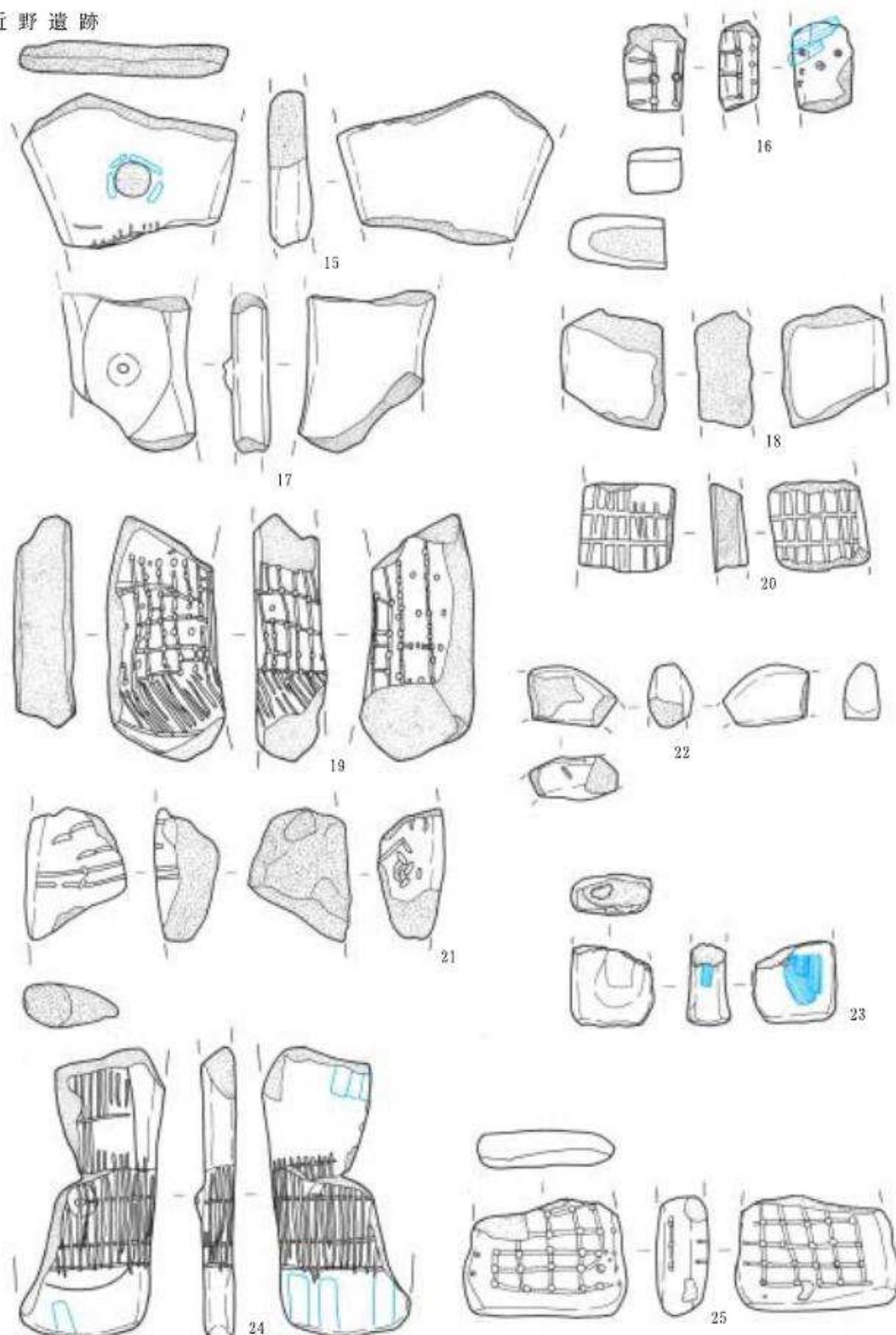


図3 近野遺跡土偶図(2)

青印 ヘラナデ調整
縮尺2分の1

近野 遺 跡

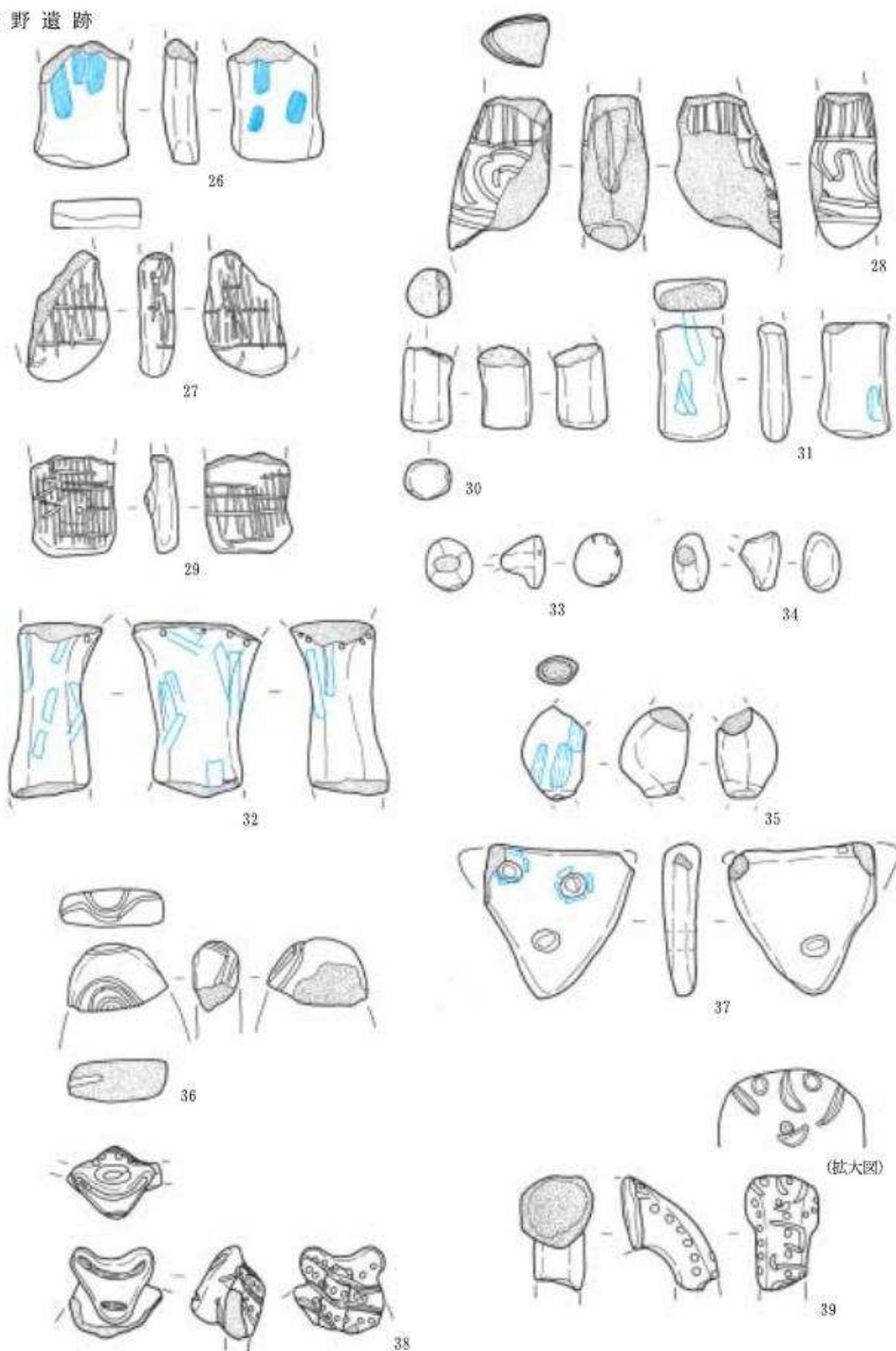
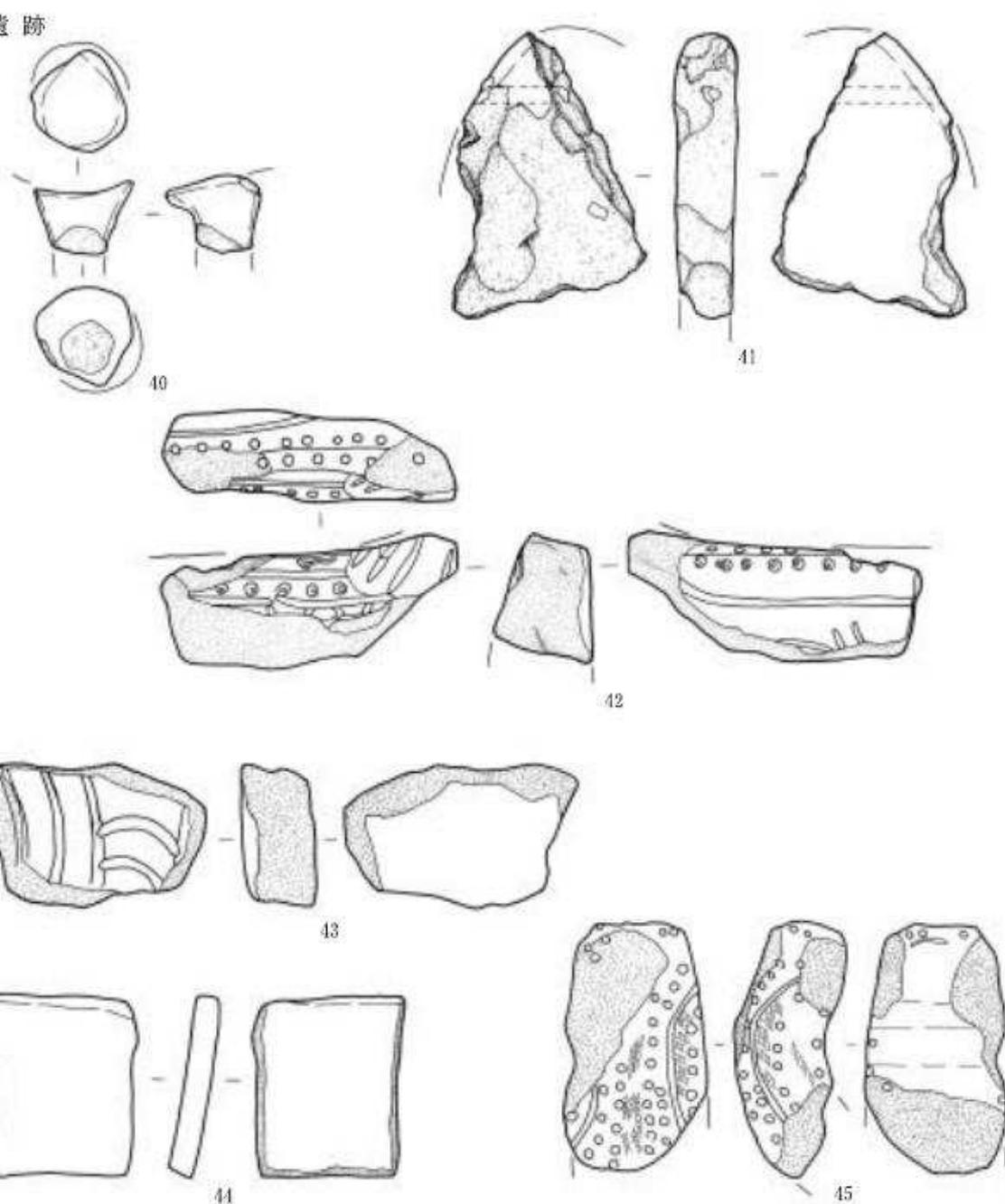


図 4 近野遺跡土偶・土製品図

青印 ヘラナデ調整
縮尺 2分の1

近野遺跡



楓ノ木(1)遺跡



図5 近野遺跡土製品・楓ノ木(1)遺跡土偶

縮尺2分の1

人面付土器（図4-38・39）

(38) は土器の口唇部上面の内側に貼り付けており、顎がとがり頭頂部が二股に分かれ全体の形態はハート形を呈する。色調は暗く焼成は良好である。文様施文は眼部をU字状に施文し、頭頂部には円形文を施文しており、全体の様相は人か動物か判然としない。(39) は壺形土器の把手部分に施文されているもので、明るい色調である。顔面は輪郭で逆三角形に区別し内部に眼部と口部を円形刺突で施文し鼻部はし字形で表現しているが稚拙な表現である。

キノコ形土製品（図5-40）

色調は明るい。傘部は窪み頸部は直立しており無文である。

土版（図5-41）

色調は明るく表面が多く剥落している。残存部から判断すると楕円形を呈すると思われる。貫通孔は先端部寄りに横位にみられる。形態的には、人形・足形付土版に類似している。

異形土製品（図5-42・43・45）

厚さが厚く日常容器と相異するものを異形土製品として取り扱った。(42) は口縁部で暗い色調を呈し、(43) は胴部で明るい色調を呈し、施文は連続刺突文を施文している。(45) は環状土製品とも考えたが、端部で止まり環状を呈していないため、異形土製品に含めた。

土器片利用土製品（図5-44）

深鉢形の口縁部破片を用いている。打ち欠きには口縁部を残して周縁を打ち欠いて方形に整形をおこなっている。

3 櫛ノ木(1) 遺跡出土土偶（図5-46・47）

青森県野辺地町に所在し、青森県埋蔵文化財調査センターが平成5年に発掘調査を実施した。調査の結果、竪穴住居跡・土坑・フラスコ状ピット等が検出し、縄文時代中期の集落跡である。

土偶は遺構外の2点で、(46) は頭頂部が丸みをもち、眼は孔で表し耳部にも穿孔がみられる。頭頂部に3つの孔がみられる。表面は眼部の下位に渦巻文を施文し、裏面は斜位の撚糸圧痕を施文している。縁が盛り上がっているため縁寄りは指ナデを用い裏面はヘラナデを用いている。粘土板は二枚重ねである。細礫を含むが石英は少ない。色調は明るく黒斑が確認される。(47) は、混入物には石英がめだつ。色調は明るく表面に黒斑が確認できる。粘土板は一枚のつくりである。調整は表裏面は確認できなかったが、側縁部の調整にヘラナデが確認できる。残存部は右腕部で十字形土偶と思われる。文様は表面に四条の沈線を横位に施文し、末端及び中間に渦巻文を施文している。表面は無文である。

4 土偶は他の遺跡に分配されたのか

近野遺跡の未報告土偶を整理していくうちに、近野遺跡で出土した土偶と三内丸山(6) 遺跡の土偶と関連があるのではないかと思った。何故にこのような発想になったのかというと、以前から三内丸山遺跡では土偶ムラと呼ばれるほど大量の土偶が出土し1,600点以上の土偶⁽²⁾が出土している。このことから筆者は大量に出土する遺跡において、土偶の分配・交換が行われていたのではないかという仮説⁽³⁾を立てていた。つまり三内丸山遺跡で分配がおこなわれていたのなら、次の時期の縄文時代後

期の段階でも伝統は継承されていたのではと考えた。狩猟・採集を基本とした社会の伝統が突然遮断され廃絶するとは考えにくい、このことは当該地域の土偶の形態を概観しても、板状の十字形土偶の伝統は早期から後期の段階においても何世代にわたって連綿と継承されているのである。また、両遺跡を取り上げた理由は3点あげられる。第1点は両遺跡が1,200mと位置的に近い点、第2点は製作時期が後期の十腰内I式期である点、第3点は実測図をみると相似面をもつ点などがあげられる。そのため、平成21年の2月に埋蔵文化財調査センター多目的室を利用して、センター所蔵の近野遺跡・三内丸山（6）遺跡の土偶をすべて広げてみた。

土偶観察に入る前に両遺跡の概要を簡略に記載する。近野遺跡は、縄文時代中期・後期の集落跡である。三内丸山遺跡と同一丘陵に位置している。縄文時代後期の十腰内I式期では、大量の遺物（遺物包含層）と土坑群・粘土採掘坑を有する遺跡である。土偶は108点（今回の未報告35点を合わせると143点）出土し三桁の数値は本県では近野遺跡だけである。一方の三内丸山（6）遺跡は近野遺跡から南側に1,200mの丘陵地に位置し縄文時代中・後期の集落跡である。土偶は74点出土し県内では近野遺跡に次ぐ出土量を呈している。なお、後期土偶については小笠原雅行（2005）が集成及び分析をおこなっている。

土偶観察

胎土の混入物では差異がみられなかった。色調は近野遺跡で表裏面に黒斑が多く全体的にくろっぽい暗褐色の色調を呈し、三内丸山（6）遺跡では明るい褐色を呈する土偶が多い。厚さでは近野遺跡では一般に厚く、三内丸山（6）遺跡では一般に薄い。文様は一部で類似面をもつものの格子状文をとりあげると、近野遺跡では格子状オンリーであるが、三内丸山（6）遺跡では格子状文と連続渦巻文を組み合わせた文様構成である。また、三内丸山（6）遺跡では縁辺部に連続渦巻文を施文する例が多い。施文位置・施文工具（沈線の幅・長さ）が相異する。土偶を観察すると、土偶のつくり手の感覚が違った土偶に対する違和感（別物）を感じた。この感覚の相異は、土偶の観察をお手伝いをしていただいた内勤3人（数多くの土偶・土製品を実測）とも共通した意見であり、両遺跡の土偶をみて同様な違和感をもったとの事である。つまり、結論をまとめると両遺跡の土偶は、つくり手が全く違う、土偶の分配・交換はみられず、遺跡の単位で土偶を製作したものと考えられる⁽⁴⁾。なお土偶の分配については、小野美代子（小野1984）が土偶の接合率の低さから、一定の場所から持ち出されたという視点であり、小林達雄（小林1988）は釧路堂遺跡の土偶と谷一つへだてた他の遺跡と接合したという遺跡間の接合の視点、谷口康浩（谷口1990）は長野県増野新切遺跡から3体分の土偶から5棟の住居跡から出土したことから、分配され外へ持ち出されたという遺構面の視点、江坂輝弥（江坂1990）が茨城県の立木貝塚が1,000点を超える土偶が周辺の集落に分配したという製作地と周辺集落からの視点などがあげられ土偶は分配されたという考え方である。特に江坂輝弥の視点は筆者の遺跡の対比から土偶観察をするという考え方と同じなのであるが、果たして土偶観察をしたうえでの結論なのか、わからない点が多い。小野・小林・谷口の視点は、土偶の部位が見つからないのは、他の場所にあるはずだという最終的に一つの物体として存在しているという考え方であるが、視点を変えて考えると、土偶の存在しない部分は遺跡内で処理され粉碎されたのではないだろうか、このことは、遺跡内から出土する土偶を投影してみると、一定の大きさに集約されており、そのため他の部位はみられないと判断したい。また、つくり手に関しては甲野勇氏が『…中期以降になるとこの製作はもっぱら土偶つ

くりの人々の手にゆだねられた考え方がよいように思われます…』（甲野1995）土偶づくりの専門職をあげたが、後期の段階は板状の中実土偶であり、技術的に特殊なものとは考えられず、専門集団の存在は否定したい。それでは、両遺跡内で何人が土偶製作に携わったのかという事であるが、土偶破片も文様施文につくり手のクセが確認されるものの、特定の人間が限定した土偶を製作していたのではなく、多くの人間が製作した土偶（遺跡内の土偶を、つくり手のクセでくくるとしたら1～2点）であり、数多くのつくり手によって土偶は製作されたと考えられる。そのため、縄文時代後期前葉の近野遺跡と三内丸山（6）遺跡とでは、土偶分配及び交換は存在しなかったという結論にいたった。

註

- (1) この乳房部のヘラナデ調整は縄文時代中期の青森市三内丸山（6）遺跡の土偶の乳房部を実見したが、ヘラナデ調整は確認できなかった。
- (2) 三内丸山遺跡は、いまだ整理中の段階であり、調査終了後15年たっても終わらないという莫大な量であるといわれている。そのため出土個数は年々変化しており、今回の個数は青森県史三内丸山遺跡編（青森県2002）の出土個数を用いた。なお、小笠原雅行は土偶研究会の発表の中で三内丸山遺跡から1,800点以上出土しているという発言があったが、公式発表でないので点数は県史にたよったが、三内丸山遺跡が日本一の土偶出土遺跡であることに変わりはない。
- (3) 土偶の分配（富山の薬売り）（成田2002・2008）があったという説である。実は馬淵川流域に位置する三戸町泉山遺跡と二戸市雨滝遺跡（明治大学所蔵）の縄文時代晩期土偶を比較・検討したことがある。観察の結果は全く別物であり、分配されていないという結論となった。なお、金子昭彦（2009）は、縄文時代晩期の大型遮光器土偶について、分配の可能性を指摘しているが、筆者も同意見であり大型遮光器土偶に注目し、観察を進めていきたいと思う。
- (4) 三内丸山（6）遺跡の土偶接合例はなかったが、今回の観察で県埋文第327集の図132-1と図22-6が接合したものであり、約40m離れて接合した。ただし、この土偶は欠損部の腕部と胴体部とでは色調が全く違い、色調の境目を目安としてもぎとったという印象を与える土偶である。

引用・参考文献

- 青森県教育委員会（1975）「近野遺跡発掘調査報告書（II）」青森県埋蔵文化財調査報告書第22集
 青森県教育委員会（1977）「近野遺跡発掘調査報告書（III）」青森県埋蔵文化財調査報告書第33集
 青森県教育委員会（1995）「櫻ノ木（1）遺跡」青森県埋蔵文化財発掘調査報告書第169集
 青森県教育委員会（1999）「三内丸山（6）遺跡I」青森県埋蔵文化財調査報告書第257集
 青森県教育委員会（2000）「三内丸山（6）遺跡II」青森県埋蔵文化財調査報告書第279集
 青森県教育委員会（2001）「三内丸山（6）遺跡III」青森県埋蔵文化財調査報告書第307集
 青森県教育委員会（2002）「三内丸山（6）遺跡IV」青森県埋蔵文化財調査報告書第327集
 青森県（2002）「青森県史 別編 三内丸山遺跡」
 江坂輝弥（1990）「日本の土偶」六興出版
 小笠原雅行（2005）「三内丸山（6）遺跡の土偶－十腰内I式前半期の土偶－」葛西勲先生還暦記念論文集刊行会

小野美代子（1984）「土偶の知識」東京美術

金子昭彦（2009）「東北地方南部の中空土偶の成立」 第6回土偶研究会北海道大会資料 土偶研究会

甲野勇（1995）「縄文土器のはなし（解説付新装版）」学生社

小林達雄（1988）「縄文人の道具」講談社

谷口康浩（1990）「土偶のこわれかた」季刊考古学第30号 雄山閣出版

成田滋彦（2002）「土偶を持って、花の東京に行ったときの話」ストーンサークル第5号

成田滋彦（2008）「青森県の土偶」『2007是川縄文シンポジウム』八戸市教育委員会

近野遺跡土偶・土製品

図番号	出土地	層位	種別	部種	法量(cm)	重量(g)	備考
図2-1	A地	I層	土偶	顔部	長さ2.3 幅2.1 厚さ2.0	4.7	—
図2-2	DQ-100	I層	土偶	胸部	長さ(5.4) 幅(6.2) 厚さ1.7	49.5	二枚重ね ヘラ調整
図2-3	DK-105	II層	土偶	腕部	長さ(7.3) 幅(6.2) 厚さ1.9	71.8	ソケット状を呈する
図2-4	DO-108	II層	土偶	体部	長さ(4.3) 幅(5.3) 厚さ1.3	23.4	ソケット状を呈する
図2-5	DR-104	I層	土偶	腕部	長さ(4.5) 幅2.2 厚さ(4.8)	28.8	ソケット状を呈する
図2-6	DM-104	II層	土偶	胸部	長さ(4.7) 幅(6.2) 厚さ1.1	31.9	貫通孔(紐ずれ) 二枚重ね
図2-7	DQ-104	I層	土偶	胸部	長さ(3.7) 幅(4.2) 厚さ1.2	13.4	貫通孔 一枚
図2-8	DP-107	II層	土偶	胸部	長さ(4.5) 幅(6.9) 厚さ2.0	56	貫通孔有り
図2-9	113小	覆土	土偶	体部	長さ(4.2) 幅(3.7) 厚さ(1.0)	16.7	—
図2-10	DO-106	II層	土偶	右腕部	長さ(3.2) 幅(3.4) 厚さ2.0	16.5	二枚重ね
図2-11	DO-106	I層	土偶	腕部	長さ(7.4) 幅(4.5) 厚さ2.1	70.3	貫通孔 二枚重ね
図2-12	EI-114	I層	土偶	体部	長さ(3.7) 幅(1.9) 厚さ1.2	11.6	—
図2-13	DM-105	I層	土偶	臍部	長さ(7.8) 幅(3.8) 厚さ2.1	80.8	二枚重ね
図2-14	67H	底直	土偶	体部	長さ(3.4) 幅(3.5) 厚さ(1.2)	14.3	二枚重ね ヘラ調整
図3-15	120小	覆土	土偶	臍部	長さ(5.4) 幅(7.5) 厚さ1.6	51.8	二枚重ね ヘラ調整
図3-16	—	—	土偶	体部	長さ(3.1) 幅(2.1) 厚さ1.3	9.5	二枚重ね ヘラ調整
図3-17	209小	V層	土偶	臍部	長さ(5.5) 幅(4.3) 厚さ1.5	32.7	一枚
図3-18	69H DP-104	II層	土偶	体部	長さ(4.1) 幅(3.5) 厚さ1.9	30.2	二枚重ね
図3-19	DQ-102	II層	土偶	体部	長さ(8.5) 幅(4.0) 厚さ2.3	78.2	三枚重ね
図3-20	70HD区	—	土偶	体部	長さ(3.2) 幅(3.2) 厚さ1.2	16.7	—
図3-21	DM-107	I層	土偶	体部	長さ(4.6) 幅(3.5) 厚さ2.1	25.7	二枚重ね
図3-22	EI-?	—	土偶	左腕部	長さ(2.2) 幅(2.9) 厚さ1.1	8.8	二枚重ね ヘラ調整
図3-23	69H DQ-104	II層	土偶	脚部	長さ(2.9) 幅(3.9) 厚さ1.5	11.7	ソケット状を呈する ヘラ調整
図3-24	DN-97	I層	土偶	臍部	長さ(10.1) 幅(4.5) 厚さ1.4	57.6	二枚重ね ヘラ調整
図3-25	DM-109	I層	土偶	脚部	長さ(4.1) 幅(5.7) 厚さ1.7	43.7	二枚重ね
図4-26	DM-107	II層	土偶	脚部	長さ(4.4) 幅(3.2) 厚さ1.1	17.8	二枚重ね ヘラ調整
図4-27	DK-196	II層	土偶	脚部	長さ(4.5) 幅(2.8) 厚さ1.3	12	二枚重ね
図4-28	DO-101	I層	土偶	右脚部	長さ(5.4) 幅(3.6) 厚さ2.3	38.4	二枚重ね
図4-29	71H カンゴウ内	土偶	臍部	長さ(3.5) 幅(2.9) 厚さ1.1	9.7	—	
図4-30	DO-101	I層	土偶	右脚部	長さ(3.0) 幅1.6 厚さ1.6	9.7	二枚重ね
図4-31	EI-115	I層	土偶	脚部	長さ(4.0) 幅(2.9) 厚さ1.0	11.8	二枚重ね ヘラ調整
図4-32	168H	I層	土偶	脚部	長さ(6.1) 幅(2.9) 厚さ4.4	62.3	ヘラ調整
図4-33	DO-105	I層	土偶	足部	長さ1.8 幅1.6 厚さ(1.6)	2.9	—
図4-34	66H	I層	土偶	足部	長さ(2.0) 幅1.2 厚さ(1.4)	2.2	—
図4-35	137小	覆土	土偶	右脚部	長さ(3.2) 幅(2.1) 厚さ2.4	14.3	ヘラ調整
図4-36	DP-104	I層	土偶	三角形土偶	長さ(2.3) 幅(3.5) 厚さ1.6	12.8	空気孔？
図4-37	100小	1・2層	土偶	三角形土偶	長さ(5.3) 幅(5.2) 厚さ1.3	27.6	ヘラ調整
図4-38	72H	1層	土製品	人面付土器	長さ(3.2) 幅(3.3) 厚さ(2.4)	15.1	—
図4-39	DR-109	2層	土製品	人面付土器	長さ(4.0) 幅2.5 厚さ(3.4)	16.6	土器の把手部分
図5-40	DL-104	1層	土製品	葺形土製品	長さ3.0 幅2.8 厚さ(2.1)	10.3	無文
図5-41	DR-108	II層	土製品	土版	長さ(8.4) 幅(5.7) 厚さ1.9	71.4	横位に貫通孔
図5-42	EN-115	I層	土製品	異形土製品	長さ(3.9) 幅(8.1) 厚さ2.9	63.5	—
図5-43	EI-114	I層	土製品	異形土製品	長さ(4.2) 幅(6.7) 厚さ(2.0)	64.5	—
図5-44	71H	1層	土製品	土器片利用 土製品	長さ(5.2) 幅(4.2) 厚さ1.1	27	深鉢形 口縁部
図5-45	DR-108	II層	土製品	異形土製品	長さ(7.2) 幅(4.2) 厚さ2.8	75.2	—

根木遺跡土偶

図番号	出土地	層位	種別	部種	法量(cm)	重量(g)	備考
図5-46	一括 H-34	II層	土偶	顔部	長さ(5.4) 幅(7.8) 厚さ1.8	46	—
図5-47	一括 H-35	III層	土偶	右腕部	長さ(5.3) 幅(3.8) 厚さ1.3	25.9	一枚

青森県埋蔵文化財調査センター 研究紀要 第14号

発行年月日 2009年（平成21年）3月6日

発 行 者 青森県埋蔵文化調査センター
〒038-0042 青森市新城字天田内152-15
TEL (017) 788-5701 FAX (017) 788-5702

印 刷 所 不二印刷工業株式会社
〒030-0802 青森市合浦一丁目10-16
TEL (017) 741-5439 FAX (017) 741-2541



BULLETIN
OF
CENTER FOR ARCHAEOLOGICAL RESEARCH
AOMORI PREFECTURE

No. 14

CONTENTS

Taisei KODAMA

An Analysis of Atone Transportation to Stone Circles During the Jomon Period

Kosei YAMAGUCHI,Takeshi NODA

Jomon Pottery with Bows and Arrows Desing from Tamanoki Site,Sannohe Town

Manabu OKUBO,Kyohei SAWADA

A Report of Test Excavations at Akedo Site in 1966

Shegehiko NARITA

Re-examination of Clay Figurines with Chipped-Off Edges

Manabu TAKIMOTO

Overview of Hara Site:Burial Mounds of the Late Kofun Period in the Southern Tsugaru

Hayato NAKAMURA

An Approach to Social Structure of Tosaminato and the Ando Family through the Remains of Earthfast

Shige hiko NARITA

A New Report on Clay Figurines from Chikano Site,Aomori City and Tsukinoki 1 Site,Noheji Town:Probabilities of Figurine-Distribution

March 2009

CENTER FOR ARCHAEOLOGICAL RESEARCH
AOMORI PREFECTURE